



中・深層生物群集：プランクトン・ネクトン

アカチョウチンクラゲ *Pandea rubra* Bigelow, 1913 (Fig. 24.1)

ヒドロ虫綱 Hydrozoa・花クラゲ目 Anthomedusae・エボシクラゲ科 Pandeidae

分布：太平洋，大西洋，南大洋，中層性。/ 傘高 7.5 cm まで。

傘は釣鐘型で深く，下傘面は濃褐色を呈する。放射管は 4 本で幅広く，その縁は鋸歯状をしている。非常に長い触手は 24 本程度で傘縁の触手瘤から生じ，中性浮遊時には水平方向へ放射状に伸長させていることが多い。三陸沖において本種にウミグモの 1 種が寄生しているのが観察されている (Fig. 24.1.B) (Pagès et al. 2007)。外洋中層域においてウミグモ類の宿主となるクラゲとして，本種の他にクロカムリクラゲ，ハッポウクラゲ *Aeginura grimaldii*，硬クラゲ目の *Voragonema pedunculata* が知られる (Child & Harbison 1986, Larson et al. 1991)。(喜多村・Lindsay)

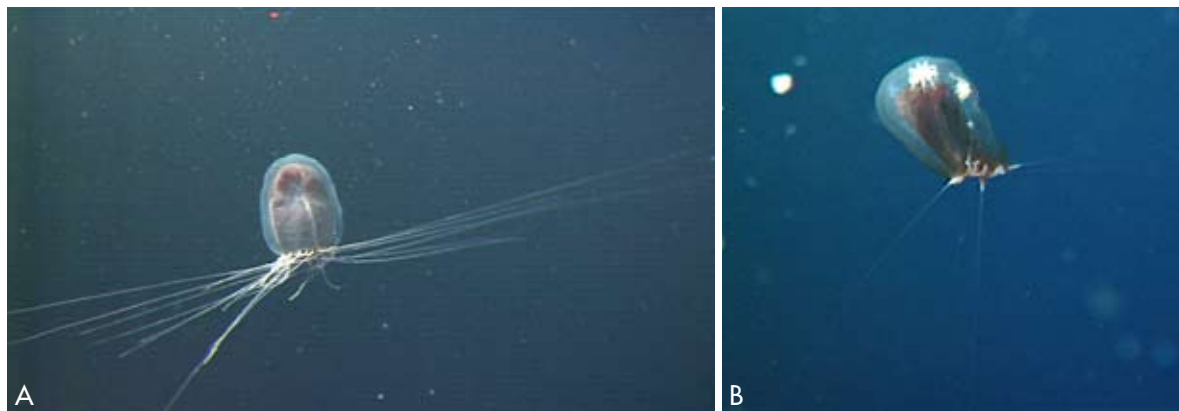


Fig. 24.1. 三陸沖. **A.** 深度 512 m (ハイパードルフィン 第 106 潜航); **B.** 深度 917 m (ハイパードルフィン 第 105 潜航). Off Sanriku. **A.** 512 m depth (Hyper-Dolphin #106); **B.** 917 m depth (Hyper-Dolphin #105).



Fig. 24.2. 三陸沖，深度 400 m (ハイパードルフィン 第 100 潜航). Off Sanriku, 400 m depth (Hyper-Dolphin #100).

◀ キライクラゲ***Calycopsis nematophora* Bigelow, 1913 (Fig. 24.2)**

ヒドロ虫綱 Hydrozoa・花クラゲ目 Anthomedusae・スグリクラゲ科 Calycopsidae

分布：北部北太平洋，表・中層性。/ 傘高 3 cm まで。

傘は釣鐘型で深く，寒天質は非常に厚い。放射管は 4 本。傘縁に走る環状管から求心管が伸び，胃基部近くにて放射管に合流する。これら放射管と求心管は合計で 16 本程度。口柄の長さは傘腔の 1/3 程度，口唇は襞状で無数の刺胞塊が並ぶ。長くて太い触手と短く細い触手を有し，いずれも先端が膨らみ刺胞瘤をなす。長い触手の先端刺胞瘤は棒状だが，短い触手の先端は球状。傘は無色透明であるが，口柄内壁は濃褐色で口唇の刺胞塊は黄色を呈する。(喜多村・Lindsay)

サルシアモドキ *Euphysa japonica* (Maas, 1909) (Fig. 24.3)

ヒドロ虫綱 Hydrozoa・花クラゲ目 Anthomedusae・クダウミヒドラ科 Tubulariidae

分布：北部北太平洋，表・中層性。/ 傘高 1.5 cm まで。

非常に深い釣鐘状の傘を持つ。口柄は円筒形で長いが傘腔内に納まる。口唇は丸型でシンプル。口柄にはピンク色または赤色を呈する生殖巣が口柄のほぼ全長にわたって発達する。放射管は 4 本。触手は 4 本でみな同長，傘高の十数倍にも伸長させて浮遊する。触手基部に眼点はない。寒天質が厚いことおよび 4 触手が同長であることから，同属の他種と区別できる。潜水調査船からの観察時には，口柄，触手瘤，触手が白色で遠目にもよく目立つ。(三宅・喜多村)

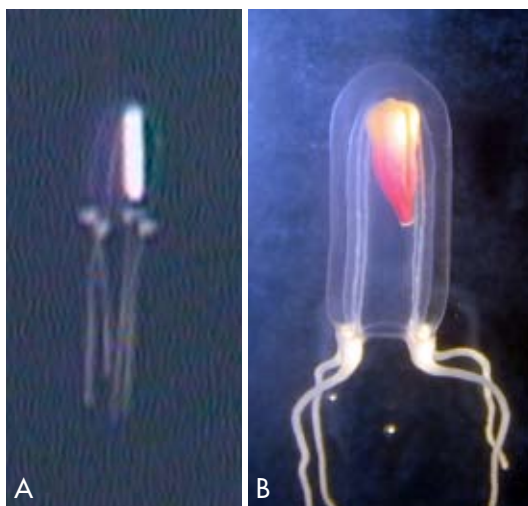


Fig. 24.3. **A.** 後志海山，深度 421 m (しんかい 2000 第 1284 潜航，三宅裕志); **B.** 水槽内撮影，Dhugal J. Lindsay. **A.** Shiribeshi Seamount, Sea of Japan, 421 m depth, Photo by H. Miyake (Shinkai 2000 #1284); **B.** Specimen photo in aquarium by D. J. Lindsay.

アケボノクラゲ *Rathkea jaschnowi* Naumov, 1956 (Fig. 24.4)

ヒドロ虫綱 Hydrozoa・花クラゲ目 Anthomedusae・シミコクラゲ科 Rathkeidae

分布：日本海，オホーツク海，ベーリング海，中層・漸深層性。/ 傘高・傘径 2 cm まで。

釣鐘状の傘を持ち，傘の寒天質は厚い。口柄支持柄を持つ。口唇には，先が細かく複雑に枝分かれした深紅の口触手を持つ。乳白色の生殖巣は複雑な襞状をなし，口柄上部の正軸上に計 4 個形成される。放射管は 4 本で太く，間軸には求心管が形成される。傘縁触手は 8 群をなし，8 個の大型触手瘤から生じる。傘縁触手基部に眼点を有さない。本書では原記載および Bouillon & Boero (2000) の分類体系に暫定的にしたがうが，複雑に枝分かれした口沿触手を持つことから，本種をシミコクラゲ科に含めることには問題がある。(三宅・喜多村)

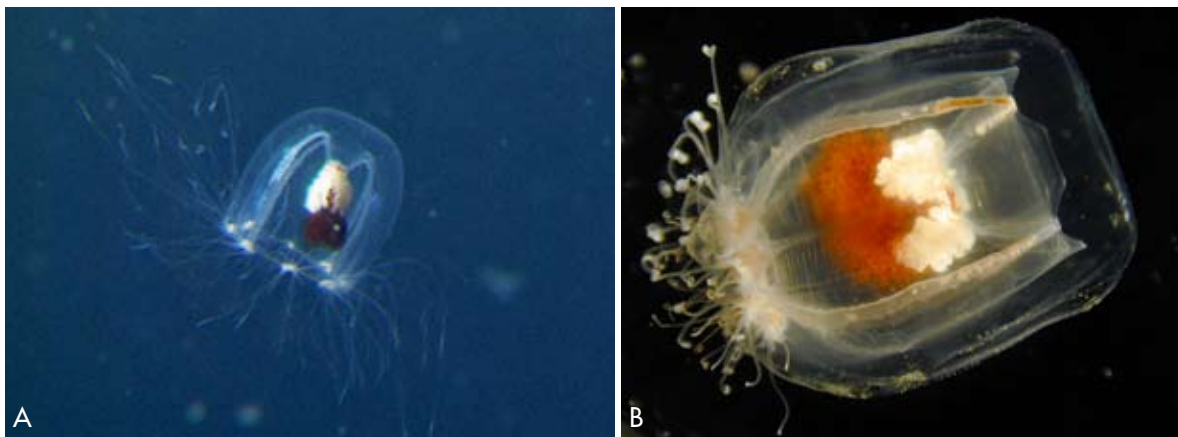


Fig. 24.4. A. 後志海山，深度 975 m (ハイパードルフィン 第 556 潜航)；B. 水槽内撮影，三宅裕志。A. Shiribeshi Seamount, Sea of Japan, 975 m depth (Hyper-Dolphin #556); B. Specimen photo in aquarium by H. Miyake.



◀ オワンクラゲ属の 1 種 *Aequorea* sp. (Fig. 24.5)

ヒドロ虫綱 Hydrozoa・軟クラゲ目 Leptomedusae・オワンクラゲ科 Aequoreidae

分布：相模湾，駿河湾，富山湾，中層性。/ 傘径 15 cm まで。

傘は碗型。下傘面には細い放射管が数多く走り，駿河湾において採集された個体（傘径 13-15 cm）は 130 本程度有していた。この放射管上には生殖巣が带状に形成される。傘縁触手はきわめて細く長い。胃は下傘中央に位置し，その直径は傘径の 1/2-2/3 程度。現場観察において遠目には白っぽく見えるが，全体的に淡青色を帯びている。オワンクラゲ属のクラゲは 15 種が報告されているが (Kramp 1961)，本属の分類は混乱していて，その中には種として疑わしいものも含まれる。本属のクラゲは，他のクラゲやクシクラゲなど体の柔らかい生物を捕食することが知られている (Wrobel & Mills 1998)。(喜多村・Lindsay)

Fig. 24.5. 相模湾，深度 494 m (ハイパードルフィン 第 109 潜航)。Sagami Bay, 494 m depth (Hyper-Dolphin #109).

シンカイクロメクラゲ *Tiaropsidium shinkaii* Kitamura, Lindsay & Miyake, 2005 (Fig. 24.6)

ヒドロ虫綱 Hydrozoa・軟クラゲ目 Leptomedusae・クロメクラゲ科 Tiaropsidae

分布：相模湾，深度 439 m。/ 傘高 2.5 cm。

傘は釣鐘型で深い。寒天質は傘頂部で厚く，傘縁部で薄い。口柄は短く，胃内壁は襞状をなす。放射管は 4 本で細い。生殖巣は放射管上の傘縁寄りに形成され，細長く波打つ形状を示す。傘縁触手は 2 種類あり，放射管末端に形成される触手瘤から生じるものは太くて長く，その他に小触手が傘縁の 4 区分に 14-18 本存在する。眼点と平衡胞を有する複合感覚器が傘縁に計 8 個存在する。口柄内壁は黒色，生殖巣および触手は白色，さらに触手瘤内部に褐色を呈する部分がある。大型の 4 触手を傘高の 10 倍以上に伸ばし遊泳する様子が観察されている。本種は，退役した「しんかい 2000」の最後の調査航海において発見され，種小名として *shinkaii* を与えられた。(喜多村)

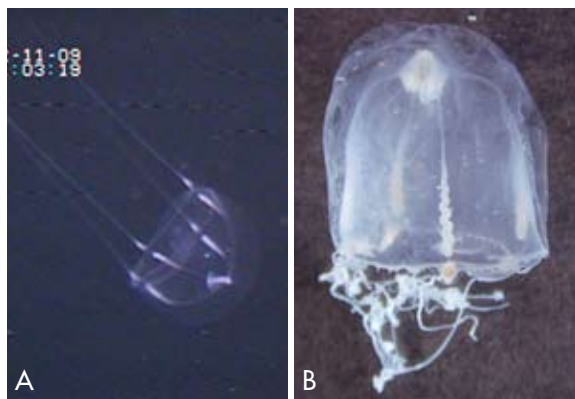


Fig. 24.6. A. 相模湾，深度 439 m (しんかい 2000 第 1409 潜航)；B. 標本，喜多村 稔。A. Sagami Bay, 439 m depth (Shinkai 2000 #1409); B. Specimen photo by M. Kitamura.

マツカサクラゲ *Ptychogena lactea* A. Agassiz, 1865 (Fig. 24.7)

ヒドロ虫綱 Hydrozoa・軟クラゲ目 Leptomedusae・ヤワクラゲ科 Laodiceidae

分布：北部北太平洋，北部北大西洋，北極海，中層性。/ 傘径 8 cm まで。

傘は半球状。放射管は 4 本で上部 1/2-2/3 には水平方向に枝管が突出する。枝管が形成される範囲を覆うように乳白色で松穂状の生殖巣が発達する。胃基部は十字状を呈する。触手は非常に数が多い。採集された標本においては 240 本程度であったが、300-500 本に達するとの報告もある (Kramp 1961)。触手間には棍棒様突起 'Cordyli' が存在する。傘は無色透明だが、現場観察では生殖巣、口柄、傘縁、触手が白色で目立つ。(三宅・喜多村)

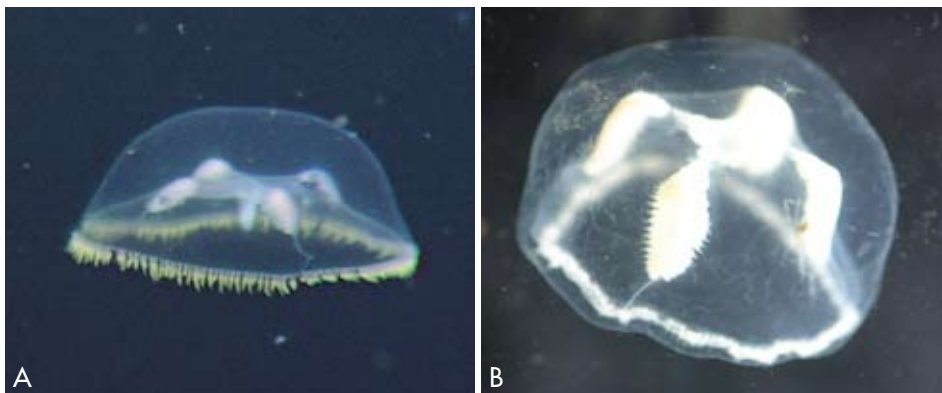


Fig. 24.7. A. 三陸沖，深度 301 m (ハイパードルフィン 第 101 潜航)；B. 水槽内撮影，三宅裕志。A. Off Sanriku, 301 m depth (Hyper-Dolphin #101); B. Specimen photo in aquarium by H. Miyake.

マツカサクラゲ属の 1 種 *Ptychogena* sp. (Fig. 24.8)

ヒドロ虫綱 Hydrozoa・軟クラゲ目 Leptomedusae・ヤワクラゲ科 Laodiceidae

分布：相模湾，深度 1006 m。/ 傘径 3 cm.

傘は半球形。傘腔は浅く傘高の 1/3 程度。とくに傘頂部において寒天質は厚いものの、もろくて壊れやすい。放射管は 4 本で太く、左右に枝管を複数回派出させる。これらはすべてが対をなすわけではない。また、枝管は環状管に連絡せず全て盲管に終わる。胃基部は四角形で広い。口柄は短く口唇はシンプルな 4 唇。傘縁には触手および棍棒様突起を持ち、両者の基部に眼点は無い。触手は三角形の触手瘤から生じ、極めて細い。採集個体は状態が悪く正確に計数できなかったが、触手数は 12-16 本程度で棍棒様突起数はその 2-3 倍。口柄および放射管とその枝管は濃褐色を呈する。逃避あるいは遊泳は観察されず、潜水調査船により生じる水流に抗うことができない。(喜多村・Lindsay)

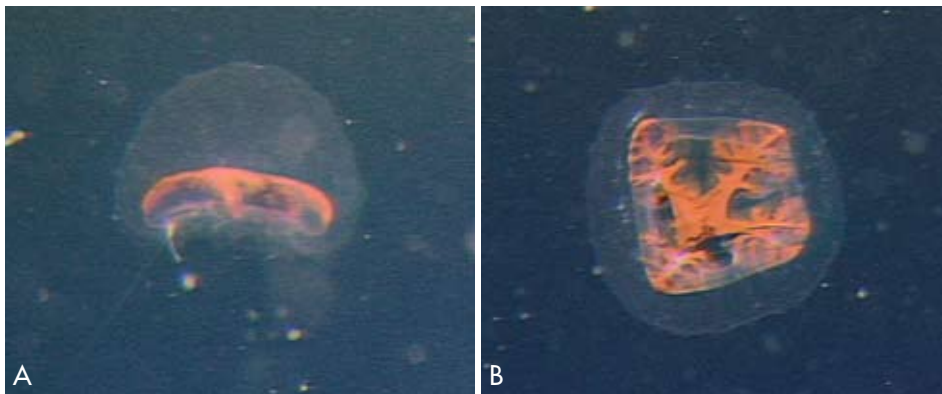


Fig. 24.8. A, B. 相模湾，深度 1006 m (ハイパードルフィン 第 240 潜航)。A, B. Sagami Bay, 1006 m depth (Hyper-Dolphin #240).



◀ ? *Chromator* (≡) sp. (Fig. 24.9)

ヒドロ虫綱 Hydrozoa・軟クラゲ目 Leptomedusae・サガミクラゲ科 Tiarannidae

分布：相模湾，深度 642 m。/ 傘高 2 cm.

傘は球形で、寒天質はきわめて厚い。傘腔は傘高の 1/2 程度。放射管は細く 3 本のみで、奇形だったのかもしれない。胃基部は放射管に沿って三つ又をなす。口柄支持柄を持たない。口柄は傘腔の 1/2 よりやや長く、濃褐色を呈し、口唇はシンプルな 3 唇に見える。触手は放射管で分かれる 3 区分に 4-8 本存在し全て同型、その基部は太いが伸長部分は極めて細くなる。触手を側方に伸ばすことが特徴的で、同様の伸長方法はアカチョウチンクラゲにも認められる。(喜多村・Lindsay)

Fig. 24.9. 相模湾，深度 642 m (ハイパードルフィン 第 520 潜航)。Sagami Bay, 642 m depth (Hyper-Dolphin #520).



シギウェッデルクラゲ属(新称)の1種

Sigiweddellia sp. (Fig. 24.10)

ヒドロ虫綱 Hydrozoa・剛クラゲ目 Narcomedusae・ヤドリクラゲ科 Cuninidae

分布：房総半島沖，中層・漸深層性。/ 傘径 3 cm.

傘は半球状かそれよりやや深い。外傘のほぼ中央の高さから計6本の触手が生じ、遊泳時にはこれらを斜め前方へ向ける。触手の長さは傘高の2倍よりやや短い程度。傘縁の各6区分には短い2次触手が1本ずつ有る。縁膜は良く発達し幅が広い。体全体が濃い赤褐色を呈する。遊泳は力強く、連続的。本属はヤドリクラゲ科の中で唯一2次触手を有するグループであり、これまでにウェッデル海から採集された *S. benthopelagica* 1種のみが記載されている (Bouillon et al. 2001)。本種が1次触手を6本しか持たないのに対して *S. benthopelagica* は10-12本を持つ。(喜多村・Lindsay)

Fig. 24.10. 房総半島沖，深度 622 m (ハイパードルフィン 第 521 潜航). Off Boso Peninsula, 622 m depth (Hyper-Dolphin #521).

カッパクラゲ属の複数種 *Solmissus* spp. (Fig. 24.11)

ヒドロ虫綱 Hydrozoa・剛クラゲ目 Narcomedusae・ヤドリクラゲ科 Cuninidae

分布：相模湾，駿河湾，房総半島沖，伊豆・小笠原諸島海域海形海山，三陸沖，中層性。/ 傘径 15 cm まで。

傘は皿形で中央部は厚く傘縁部は薄い。非常にもろく、ゆっくりと吸い込むように採集しても壊れやすい。胃は非常に大きく、その縁部は盲嚢を形成する。全体的に無色透明であるが、胃盲嚢の縁が淡いピンク色・紫色あるいは黄色を呈することもある。胃盲嚢と触手は同数で 20-30 程度。1つの胃盲嚢の直上に1本の触手が位置している。外傘面は平滑。傘縁に‘Otoporphae’と呼ばれる外胚葉性細胞列を持たない。種同定には、傘縁の平衡器数が重要とされ、映像からの同定は困難である。触手および胃盲嚢が白く目立ち、胃盲嚢の縁に卵を持っている個体もしばしば観察されている。トックリクラゲを捕食する様子が観察されている (Fig. 24.11.D) (喜多村・Lindsay)



Fig. 24.11. A. 相模湾，深度 777 m (ハイパードルフィン 第 523 潜航)；B. 駿河湾，深度 710 m (ハイパードルフィン 第 87 潜航)；C. 伊豆・小笠原諸島海域海形海山，深度 228 m (ハイパードルフィン 第 81 潜航)；D. 房総半島沖，深度 538 m (ハイパードルフィン 第 521 潜航)。A. Sagami Bay, 777 m depth (Hyper-Dolphin #523); B. Suruga Bay, 710 m depth (Hyper-Dolphin #87); C. Kaikata Seamount, Izu-Ogasawara (Bonin) Islands area, 228 m depth (Hyper-Dolphin #81); D. Off Boso Peninsula, 538 m depth (Hyper-Dolphin #521).

ツヅミクラゲ *Aegina citrea* Eschscholtz, 1829 (Fig. 24.12)

ヒドロ虫綱 Hydrozoa・剛クラゲ目 Narcomedusae・ツヅミクラゲ科 Aeginidae

分布：太平洋，大西洋，インド洋，南大洋，地中海，中層・漸深層性。/ 傘径 5 cm まで。

傘は半球形よりやや深い。傘腔は傘高の 2/3 程度。傘の寒天質は傘頂付近で特に厚い。触手は 4 本だが、まれに 5-6 本を有する個体もある。触手基部は寒天質内に突き刺さった呈をなす。外傘の触手派出位置から傘頂に向かって深い溝が走っている。胃盲嚢は、隣り合う 2 触手間に 2 個ずつの計 8 個。写真の個体は、各盲嚢の傘縁側の縁に切れ込みを 1 つずつ有し、計 16 の盲嚢に分かれているように見える。この切れ込みのない個体を別種 *A. rosea* とする報告もあるが、Russell (1954) にしたがって *A. rosea* を *A. citrea* のシノニムとした。傘縁に二次触手と 'Otoporpace' を有さない。生物発光が認められる。(喜多村・三宅)

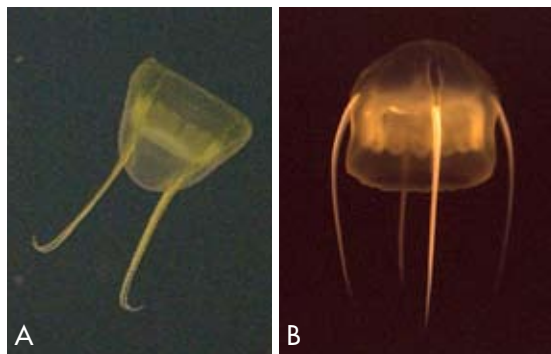


Fig. 24.12. A. 相模湾，深度 804 m (しんかい 2000 第 1087 潜航)；B. 水槽内撮影，三宅裕志。A. Sagami Bay, 804 m depth (Shinkai 2000 #1087); B. Specimen photo in aquarium by H. Miyake.

ハッポウクラゲ *Aeginura grimaldii* Maas, 1904 (Fig. 24.13)

ヒドロ虫綱 Hydrozoa・剛クラゲ目 Narcomedusae・ツヅミクラゲ科 Aeginidae

分布：太平洋，大西洋，インド洋，北極海，南大洋，中層性。/ 傘径 4.5 cm まで。

傘は半球形よりやや浅い。寒天質は傘頂付近でやや厚く、傘縁で薄い。8 本の一次触手および 16 個の胃盲嚢を有するが、これらの数は前後する。その場合も、胃盲嚢数は触手数に 2 倍。一次触手の基部は、傘に深く突き刺さった格好で尖っている。胃は大きく、丸い口唇を持つ。傘縁の 8 区分には、各々 3-5 本の短い二次触手および 1-2 個の平衡胞を持つものの 'Otoporpace' は存在しない。胃、胃盲嚢、一次触手は濃褐色を呈する。中性浮遊時には、一次触手を側方にまっすぐ伸ばしていることが多い。生物発光が認められる。(喜多村・Lindsay)

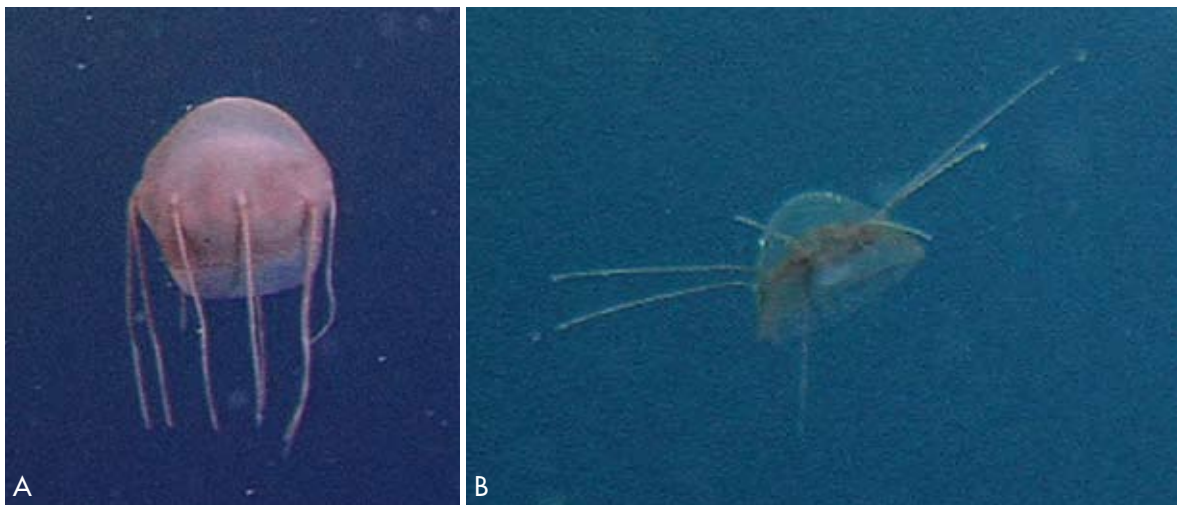


Fig. 24.13. A. 三陸沖，深度不明(ハイパードルフィン 第 99 潜航)；B. 伊豆大島東方沖，深度 732 m (ハイパードルフィン 第 522 潜航)。A. Off Sanriku, depth unknown (Hyper-Dolphin #99); B. East of Izu-Oshima Island, 732 m depth (Hyper-Dolphin #522).

ヤジロベエクラゲ *Solmundella bitentaculata* (Quoy & Gaimard, 1833) (Fig. 24.14)

ヒドロ虫綱 Hydrozoa・剛クラゲ目 Narcomedusae・ツヅミクラゲ科 Aeginidae

分布：太平洋，大西洋，インド洋，地中海，南大洋，表・中層性。/ 傘径 1 cm まで。

傘は円錐形に近く、傘頂部は丸みを帯びる。寒天質は傘上部でとくに厚く、傘腔は傘高の半分程度の深さ。胃盲嚢は 8 個に分かれ、口唇は単純な円形を示す。触手は 2 本で、傘高の 4 倍程度の長さがあり、傘頂よりやや下がった高さから生じる。遊泳時にはこれらを後方に引きずるのではなく、一旦傘頂方向へ張り出しその後左右に分かれる。傘縁には 'Otoporpace' と二次触手を持たない。生物発光あり。(喜多村・Lindsay)

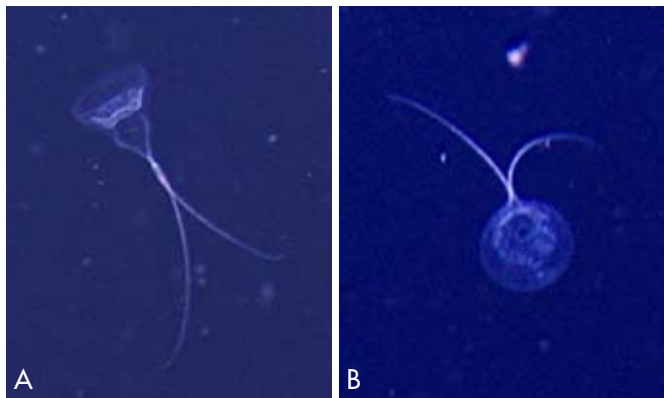


Fig. 24.14. A, B. 相模湾，深度不明(ハイパードルフィン 第 14 潜航)。A, B. Sagami Bay, depth unknown (Hyper-Dolphin #14).

剛クラゲ目の1種 *Narcomedusae* gen. et sp. (Fig. 24.15)

ヒドロ虫綱 Hydrozoa・剛クラゲ目 *Narcomedusae*

分布：相模湾，鳩間海丘，三陸沖，中層性。/ 傘径 3-4 cm.

傘は円錐形に近い。寒天質は，傘頂付近で厚く傘縁で薄くなる。口唇は単純な円形。一次触手 4 本は外傘のほぼ中央の高さから生じ，傘縁には二次触手を計 4 本と平衡棍を計 8 個有する。中性浮遊時，一次触手は傘頂に一度向かった後，鋭角に曲がり四方に広げられる。隣合う 2 本の一次触手の間には 1 つずつ計 4 個の胃盲嚢を有し，各盲嚢の外縁に切れ込みが 7-8 ヲ所入っている。あるいは，隣り合う 2 つの切れ込みの間を 1 つの胃盲嚢ととらえるべきなのかもしれない（すなわち胃盲嚢数は計 30 前後）。本種が自身よりも大型で尾虫類の放棄ハウスと思われる懸濁物に，二次触手を用いて取り付いている様子が観察されている。一般に剛クラゲ類はゼラチン質生物を捕食すると考えられており（Purcell & Mills 1988），この観察例も捕食行動をとらえたものと思われる。（喜多村・Lindsay）

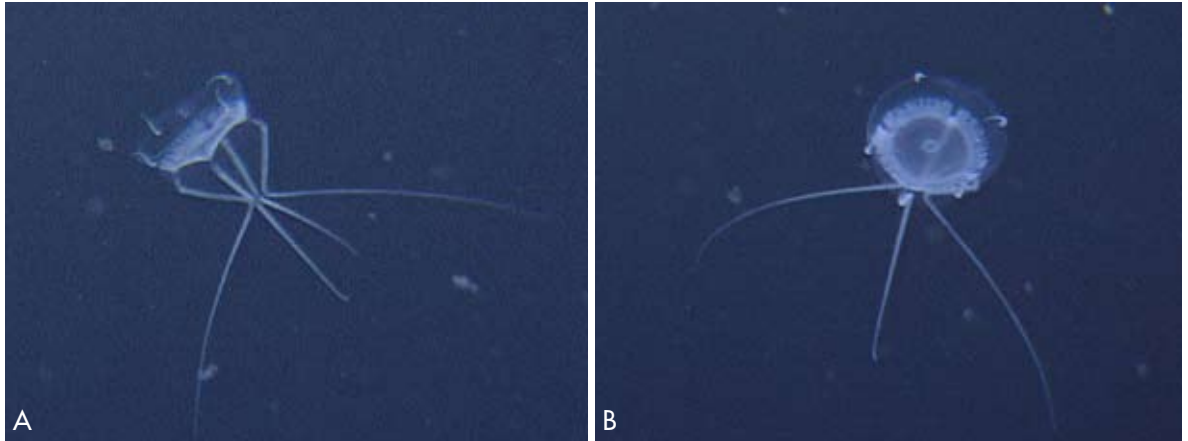


Fig. 24.15. A, B. 三陸沖，深度 459 m（ハイパードルフィン 第 107 潜航）。A, B. Off Sanriku, 459 m depth (Hyper-Dolphin #107).

トックリクラゲ *Botrynema brucei* Browne, 1908 (Fig. 24.16)

ヒドロ虫綱 Hydrozoa・硬クラゲ目 *Trachymedusae*・テングクラゲ科 *Halicreatidae*

分布：太平洋，大西洋，インド洋，北極海，南大洋，漸深層性。/ 傘径 3 cm まで。

傘は半球形で傘頂にドアノブ型の突起を有する。口柄は短く，口唇は単純な円形。放射管は 8 本で幅広い。これら放射管の胃側 1/2 は傘縁側 1/2 に比べて太く，ここに生殖巣が形成される。傘縁触手には 2 種類あり，放射管末端にあたる 8 カ所からは太くて長い触手が生じ，その他にも計 16 群に分かれて短い触手が生じる。後者の触手は，太さが一様ではなく連続的に変化する。また，両触手とも根元から切れやすく採集後ほとんど残らない。（喜多村・Lindsay）

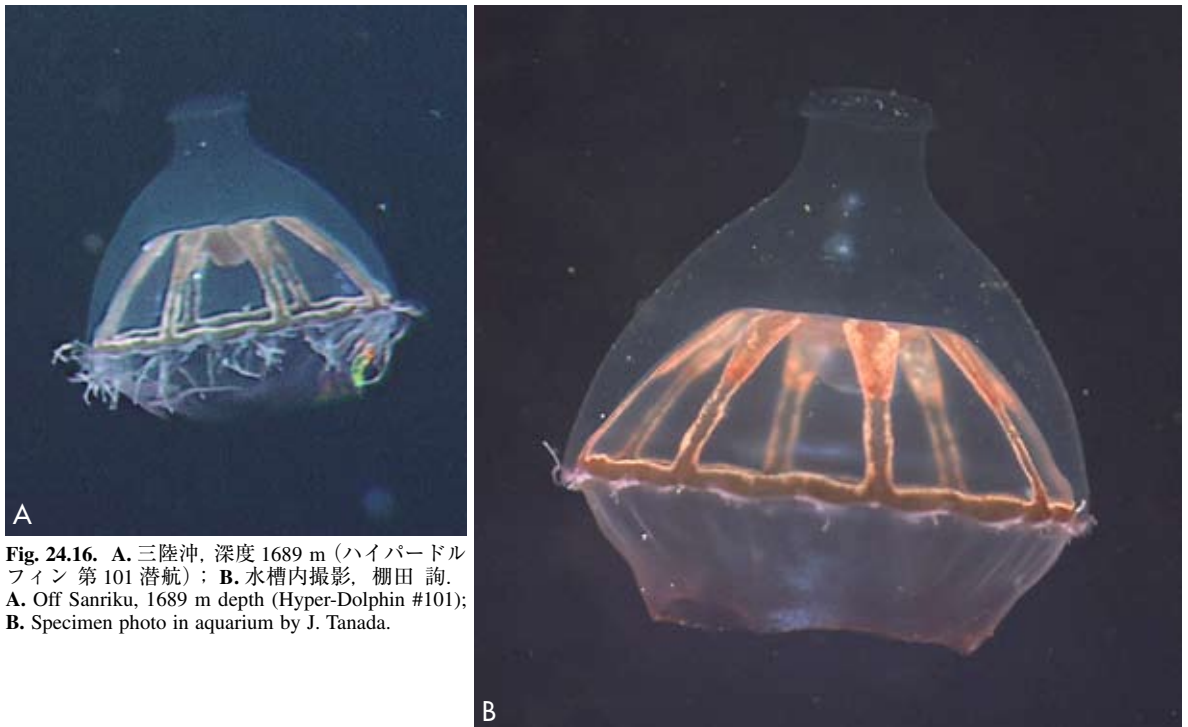


Fig. 24.16. A. 三陸沖，深度 1689 m（ハイパードルフィン 第 101 潜航）；B. 水槽内撮影，棚田 詢。
A. Off Sanriku, 1689 m depth (Hyper-Dolphin #101);
B. Specimen photo in aquarium by J. Tanada.

テングクラゲ *Halicreas minimum* Fewkes, 1882 (Fig. 24.17)

ヒドロ虫綱 Hydrozoa・硬クラゲ目 Trachymedusae・テングクラゲ科 Halicreatidae

分布：太平洋，大西洋，インド洋，北極海，南大洋，中層・漸深層性。/ 傘径 4 cm まで。

傘は比較的平たいが傘頂部は著しく突出する。傘腔は浅い。外傘上の傘縁からやや上方に計 8 カ所の突起群がある。傘はこの 8 突起群より上方で厚く堅いが、突起群より傘縁側で薄くもろい。放射管は 8 本で太く、放射管上に生殖巣が形成される。口唇は円形。触手は非常に数が多い、既往の報告では 600 本に達するが (Russell 1954)、採集時にはそのほとんどが失われる。個々の触手は、基部は伸縮性に富むものの先端部は堅く尖る。傘は無色透明であるが、生殖巣および触手は白色あるいは赤色で目立つ。生物発光が認められる。(喜多村・Lindsay)



Fig. 24.17. 相模湾. **A.** 深度 569 m (ハイパードルフィン 第 523 潜航); **B.** 深度 1042 m (ハイパードルフィン 第 79 潜航). Sagami Bay. **A.** 569 m depth (Hyper-Dolphin #523); **B.** 1042 m depth (Hyper-Dolphin #79).

トゲナシテングクラゲ属(新称)の複数種 *Haliscera* spp. (Fig. 24.18)

ヒドロ虫綱 Hydrozoa・硬クラゲ目 Trachymedusae・テングクラゲ科 Halicreatidae

分布：相模湾，房総半島沖，中層・漸深層性。/ 傘径 1.5 cm.

傘は半球形よりやや尖る。寒天質は傘頂部がきわめて厚く、傘縁部が薄い。口柄は短く、口唇は丸型で幅広い。放射管は 8 本で幅広く、その胃基部近くまたは中ほどに卵形の生殖巣が形成される。触手はすべて同型、末端部が針状で傘縁に一列に並ぶ。外傘に 8 群の突起群がないことによりテングクラゲ属と区別される。トゲナシテングクラゲ属としてこれまで 4 種が記載されているが、触手および平衡器数、生殖巣の形成位置、触手基部の形態により種同定される。映像からは、放射管上の生殖巣が胃に近接するものとそうでないものが見られ、日本近海には複数種が存在するものと思われる。(喜多村・Lindsay)



Fig. 24.18. 相模湾. **A.** 深度 458 m (ハイパードルフィン 第 523 潜航); **B.** 深度 510 m (ハイパードルフィン 第 518 潜航). Sagami Bay. **A.** 458 m depth (Hyper-Dolphin #523); **B.** 510 m depth (Hyper-Dolphin #518).



◀ テングクラゲ科の1種 Halicreatidae gen. et sp. (Fig. 24.19)

ヒドロ虫綱 Hydrozoa・硬クラゲ目 Trachymedusae・テングクラゲ科 Halicreatidae

分布：三陸沖，1400 m 以深./ 傘径 1-2 cm?

傘は半球形より浅い。寒天質は薄く，傘頂突起を持たない。胃は大きく，その幅は傘径の 1/2 程度。口柄支持柄はない。口唇は単純な円形と思われる。放射管は計 8 本で幅広い。映像からは不鮮明であるが，触手は放射管により分かれたる各 8 区分に 4 本ずつの計 32 本程度ですべてが同型。触手先端は，肥大あるいは縮めているものと思われる。胃，放射管，環状管，および触手はオレンジ色を呈する。(喜多村・Lindsay)

Fig. 24.19. 三陸沖，1400 m 以深(ハイパードルフィン 第 59 潜航)．Off Sanriku, below 1400 m (Hyper-Dolphin #59).

ニジクラゲ *Colobonema sericeum* Vanhöffen, 1902 (Fig. 24.20)

ヒドロ虫綱 Hydrozoa・硬クラゲ目 Trachymedusae・イチメガサクラゲ科 Rhopalonematidae

分布：太平洋，大西洋，インド洋，中層性。相模湾では深度 500 m 付近に多い./ 傘高 5 cm まで。傘は釣鐘型で，8 本の放射管を有しそのほぼ全長にわたって生殖巣が発達する。口柄は短い。触手は計 32 本で長い。縁膜は幅広く，発達している。生時は，傘は無色透明だが口柄，放射管，生殖巣，触手が白く目立ち，中性浮遊時には触手の末端付近が縮れた状態であることが多い。本種は，外敵から逃れる際に自らの触手を切り離し，これが発光して外敵の目をあざむくといわれているが，相模湾における観察では潜水調査船から逃れる際に触手を切り離さないことの方が多い。下傘面には筋肉が発達し，採集後，光にかざすと虹色に反射する。(喜多村・Lindsay)

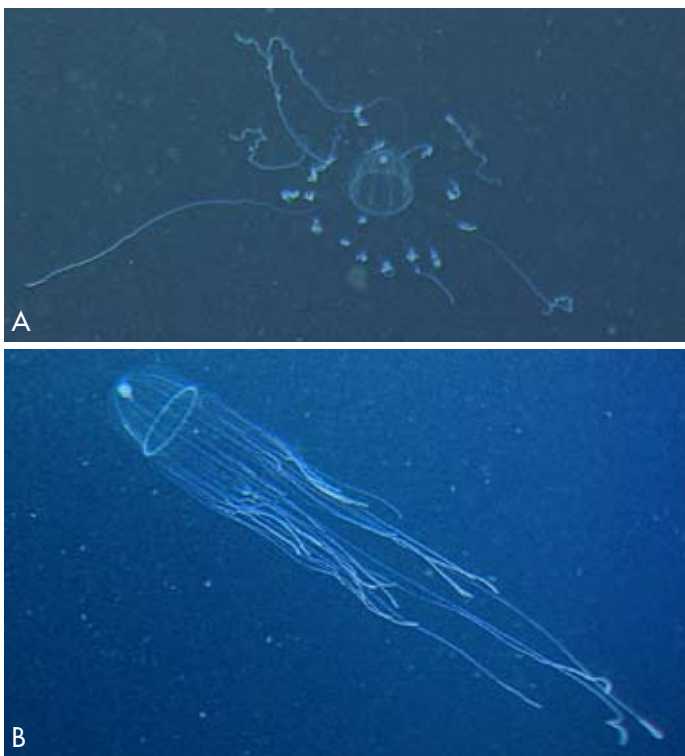


Fig. 24.20. A. 伊豆大島東方沖，深度 497 m (ハイパードルフィン 第 522 潜航)；B. 相模湾，深度 500 m (ハイパードルフィン 第 520 潜航)．A. Off Izu-Oshima Island, 497 m depth (Hyper-Dolphin #522)；B. Sagami Bay, 500 m depth (Hyper-Dolphin #520).



◀ クロクラゲ *Crossota rufobrunnea* (Kramp, 1913) (Fig. 24.21)

ヒドロ虫綱 Hydrozoa・硬クラゲ目 Trachymedusae・イチメガサクラゲ科 Rhopalonematidae

分布：北部北太平洋，北大西洋，500 m 以深./ 傘径 1.5 cm.

傘は半球形。外傘上には傘頂から傘縁に向かって放射状に溝が走る。口柄支持柄は持たない。放射管は 8 本。生殖巣は 8 個でソーセージ状をなし，胃基部近くの放射管上から垂れ下がる。傘の寒天質部分は無色透明であるが，その他の部分（下傘面，口柄，生殖巣，放射管，触手）は濃褐色を呈する。傘縁触手は一列に並び計 200-250 本程度。クロクラゲ属の中で本種は *C. brunnea* と形態的に非常によく似るが，*C. brunnea* は触手が複数列をなし計 600 本以上に達するので本種と区別できる。触手は採集時に切れやすいため，触手根の数を計数する。(喜多村・Lindsay)

Fig. 24.21. A. 相模湾，深度 802 m (ハイパードルフィン 第 520 潜航)；B. 標本(相模湾)，喜多村 稔。A. Sagami Bay, 802 m depth (Hyper-Dolphin #520)；B. Specimen (Sagami Bay) photo by M. Kitamura.

フカミクラゲ

Pantachogon haeckeli Maas, 1893 (Fig. 24.22)

ヒドロ虫綱 Hydrozoa・硬クラゲ目 Trachymedusae・イチメガサクラゲ科 Rhopalonematidae

分布：太平洋，大西洋，インド洋，北極海，南大洋，地中海，中層・漸深層性。/ 傘径 1.5 cm まで。

傘は半球形よりやや深い。口柄は短く、支持柄を持たない。放射管は 8 本で細い。生殖巣は、放射管のほぼ全長にわたって形成されるが胃基部とは接しない。触手はすべて同型である。フカミクラゲ属は下傘面の筋肉帯がよく発達し、その傘頂側の縁は円形をなすことが特徴で、本種は傘縁の各 8 区分に触手を 8 本ずつ有する。口柄、生殖巣、触手はあざやかなオレンジ色を呈する。（喜多村・Lindsay）

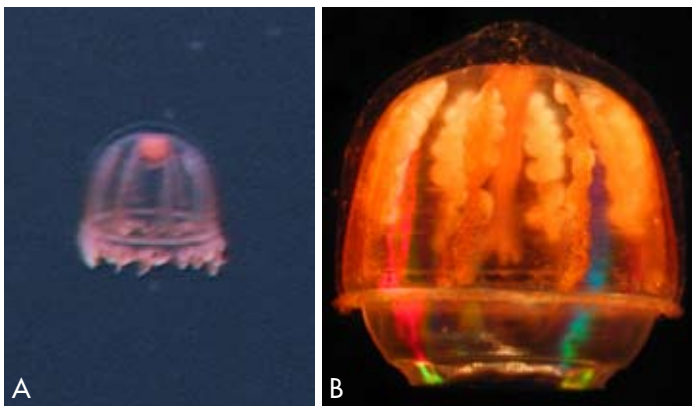


Fig. 24.22. A. 三陸沖，深度不明（ハイパードルフィン 第 59 潜航）； B. 水槽内撮影，三宅裕志。A. Off Sanriku, depth unknown (Hyper-Dolphin #59); B. Specimen photo in aquarium by H. Miyake.

イチメガサクラゲ科の 1 種 - 1 Rhopalonematidae gen. et sp. 1 (Fig. 24.23)

ヒドロ虫綱 Hydrozoa・硬クラゲ目 Trachymedusae・イチメガサクラゲ科 Rhopalonematidae

分布：三陸沖。/ 傘径 1-2 cm?.

前種に形態・色彩が非常によく似るが、触手が 8 本のみであることによって区別される。また、口柄も前種よりやや長く傘腔の 1/2 程度。潜水調査船から逃れる際に、触手を自ら切り離す逃避行動が観察された (Fig. 24.23.B)。イチメガサクラゲ科のクラゲは触手を多数持つものが多く、8 本のみ有するものに *Sminthea* 属がいる。本属には *S. arctica* および *S. eurygaster* が含まれるが前者はその存在が疑問視され、後者と本種は生殖巣の形態が異なる。オレンジ色の色彩はフカミクラゲ属に、放射管のほぼ全長にわたって形成される生殖巣の形態はニジクラゲ属に似ている。（喜多村・Lindsay）

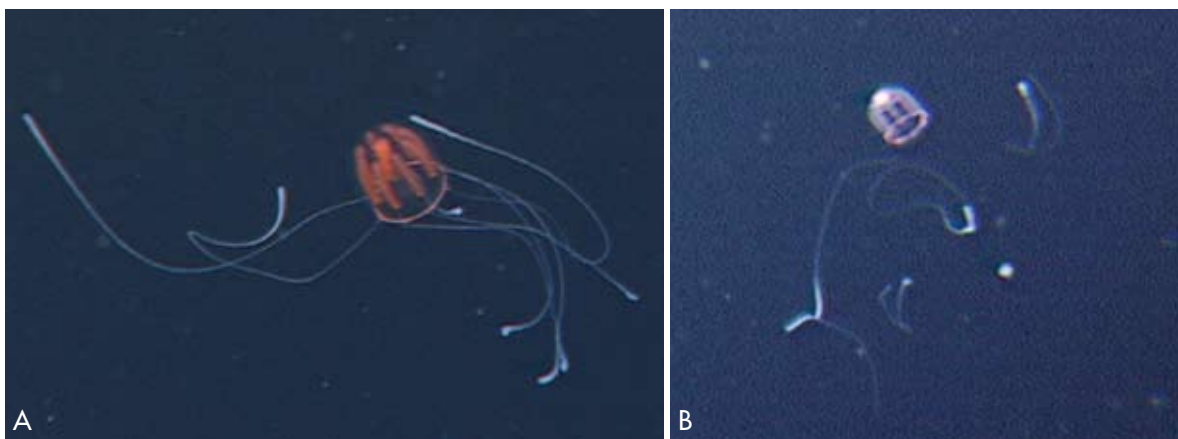


Fig. 24.23. A, B. 三陸沖，深度不明（ハイパードルフィン 第 59 潜航）。A, B. Off Sanriku, depth unknown (Hyper-Dolphin #59).



イチメガサクラゲ科の 1 種 - 2

Rhopalonematidae gen. et sp. 2 (Fig. 24.24)

ヒドロ虫綱 Hydrozoa・硬クラゲ目 Trachymedusae・イチメガサクラゲ科 Rhopalonematidae

分布：相模湾，深度 700-1500 m/ 傘径 2 cm まで。

傘は皿状であるがやや深い。放射管は 8 本で細い。口柄は短く傘高の 1/4 程度。胃壁の正軸および間軸に耳朶状の突出を有する。触手は非常に数多いが、外敵（潜水調査船）から逃れる際に自ら切り離すためよく観察されていない。しかし触手痕の観察から、同一型の触手が一列に並んでいると考えられる。傘縁の平衡器は 8 個。傘は無色透明、口柄はオレンジ色、触手は白色を呈する。相模湾において 700 m 以深に高密度で分布し、個体数の上で最優占する。本種は、Madin & Madin (1991) が示す *Arctapodema* 属クラゲの写真によく似ているが、*Arctapodema* 属は分類学的再検討が必要で、ここでは科レベルの同定にとどめた。（喜多村・Lindsay・三宅）

Figs. 25.24. 相模湾，深度 896 m（ハイパードルフィン 第 518 潜航）。Sagami Bay, 896 m depth (Hyper-Dolphin #518).

チャケムシクラゲ *Ramosia vitiazi* Stepanjants, 1967 (Fig. 24.25)

ヒドロ虫綱 Hydrozoa・管クラゲ目 Siphonophora・ケムシクラゲ科 Apolemiidae

分布：オホーツク海，三陸沖，房総沖，深度 400-800 m./ 泳鐘部の長さ 7-8 cm.

全身が濃褐色を呈する。泳鐘は，その表面に隆起線が走っていないため，柔らかく壊れやすい。また，幹に接する面が深い溝となっている点はこのケムシクラゲ科の種類と同じであるが，その溝幅は他よりも広い。泳囊上の水管はいずれも幅広く，このうち両側を走るものは蛇行せずに直線的で，盲管を持たない。体を構成する各パーツの結合力は弱く，潜水調査船の引き起こす水流の乱れにより容易に壊れる。Fig. 24.25.B は，壊れて保護葉がバラバラに飛び散る様子。（喜多村・三宅・Lindsay）



Fig. 24.25. A. 三陸沖，深度 434 m (ハイパードルフィン 第 99 潜航); B. 三陸沖，深度 810 m (ハイパードルフィン 第 105 潜航). A. Off Sanriku, 434 m depth (Hyper-Dolphin #99); B. Off Sanriku, 810 m depth (Hyper-Dolphin #105).

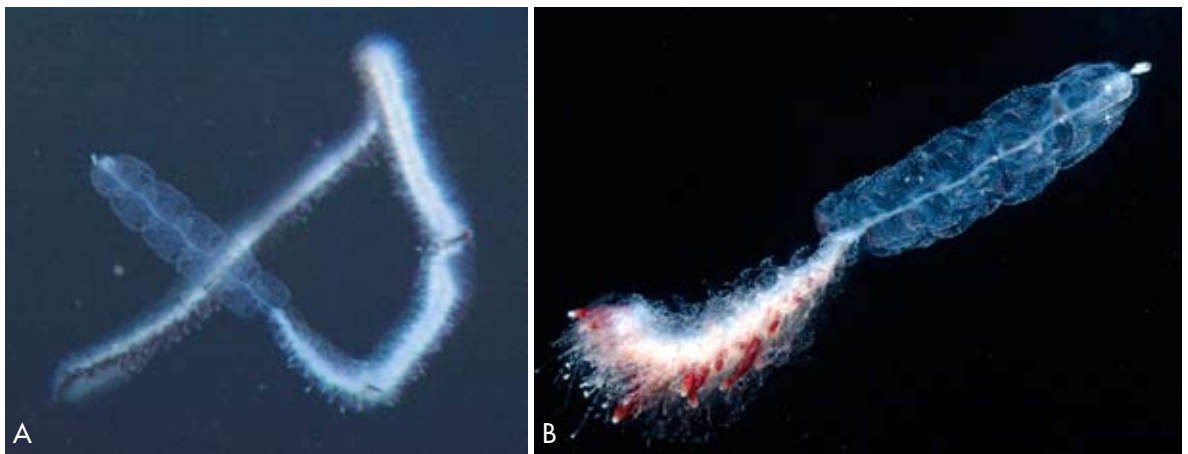


Fig. 24.26. A. 三陸沖，深度 746 m (ハイパードルフィン 第 107 潜航); B. 標本，Dhugal J. Lindsay; C. 泳鐘，標本(三陸沖)，喜多村 稔。A. Off Sanriku, 746 m depth (Hyper-Dolphin #107); B. Specimen (Off Sanriku) photo in aquarium by D. J. Lindsay; C. Nectophores, specimen photo in aquarium by M. Kitamura.

カノコケムシクラゲ

Tottonia contorta Margulis, 1976 (Fig. 24.26)

ヒドロ虫綱 Hydrozoa・管クラゲ目 Siphonophora・ケムシクラゲ科 Apolemiidae

分布：北太平洋，北極海，深度 100-1500 m./ 泳鐘部の長さ 10 cm.

各泳鐘の基部近くから触手が生じていることを視認でき (Fig.24.26.A)，これはケムシクラゲ科の特徴である。観察された標本では，これら各泳鐘基部からの触手は太く短いものが 1 本ずつであるが，既往の報告では 1-2 本ずつとされる (Mapstone 2003)。泳鐘は計 10 個程度，泳囊表面を走る水管には盲管を持たない。泳鐘および保護葉は，無色透明で外表面に斑点模様 Opaque patch がある。栄養個虫は大型でよく目立ち，全体に褐色であるが唇部分のみ白色。個々の泳鐘は比較的大型であるが，栄養部が長く密であり，群体としての遊泳能力は高くない。（喜多村・三宅・Lindsay）

ケムシクラゲ科の1種 Apolemiidae gen. et sp. (Fig. 24.27)

ヒドロ虫綱 Hydrozoa・管クラゲ目 Siphonophora・ケムシクラゲ科 Apolemiidae

分布：相模湾，深度 605 m./ 泳鐘部の長さ 4-5 cm.

伸長時には，幹を環状に広げ，そこから無数の細い触手をのれん状に垂れ下げる (Fig. 24.27.B). 潜水調査船の接近に反応して触手および幹を縮め，逃避を試みた (Fig. 24.27.A). 泳鐘部は棒状，厚みと丸みを帯びている．泳鐘は無色で球状に近く，幹に接する面には深い溝を有する (Fig. 24.27.C). 泳囊両側を走る水管には盲管部を持たない．収縮時，栄養部に一列に並んで茶色く目立つのは栄養体や感触体 Palpon およびこれらの周りの白色域は縮めた触手と思われる．泳鐘の概形や栄養部の色彩パターンはカノコケムシクラゲに似るが，泳鐘表面に斑点模様 Opaque patch がない．栄養部の長さに比べて泳鐘部が短く，遊泳速度は遅い．Fig. 24.27.A と B は同一個体の収縮・伸長した様子で，C はその個体の泳鐘である．これまで一例のみ観察され，採集も不完全で泳鐘を始め一部しか得られていない．(喜多村・三宅・Lindsay)

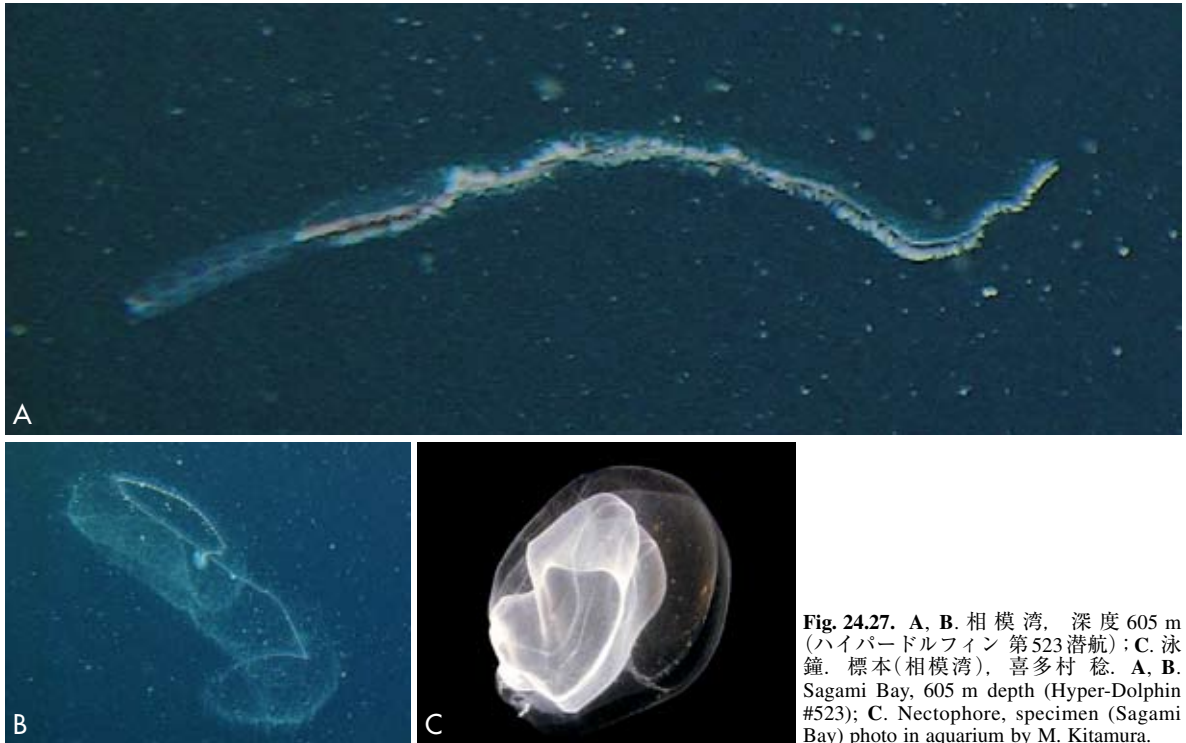


Fig. 24.27. A, B. 相模湾，深度 605 m (ハイパードルフィン 第523潜航); C. 泳鐘．標本(相模湾)，喜多村 稔. A, B. Sagami Bay, 605 m depth (Hyper-Dolphin #523); C. Nectophore, specimen (Sagami Bay) photo in aquarium by M. Kitamura.

ヨウラククラゲ *Agalma okeni* Eschscholtz, 1825 (Fig. 24.28)

ヒドロ虫綱 Hydrozoa・管クラゲ目 Siphonophora・ヨウラククラゲ科 Agalmatidae

分布：亜熱帯海域，表・中層性./ 気泡体から栄養部末端までの長さ約 15 cm.

撮影個体は採集されていないが，ヨウラククラゲと思われる．川村 (1981) は，本種の形態を「精巧美麗なガラス細工の胡瓜」と表現している．本種の泳鐘部 (写真の左半分) は，Y 字型で平板な泳鐘が 2 列に並び，12 角柱をなす．栄養部 (右半分) は保護葉が規則正しく 8 列に並び，泳鐘部よりもやや太い円柱状．触手は多数の側枝を持つ．側枝は長い柄と膨出部である刺胞叢からなり，刺胞叢先端には 1 本の終末叢と 2 本の終糸を持つ．触手は，伸長時には栄養部の外に遠く伸ばすが，遊泳時には縮めて栄養部内に収める．生物発光あり．(喜多村・三宅・Lindsay)

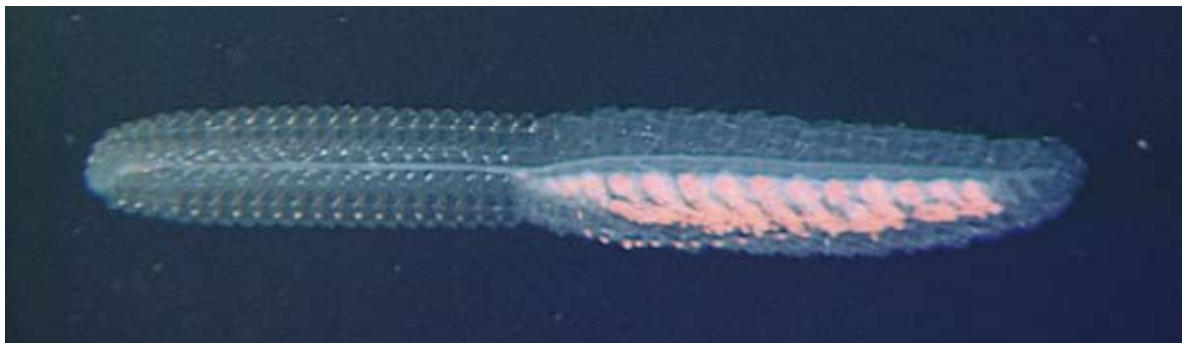


Fig. 24.28. 伊豆・小笠原諸島海域海山，深度 530 m (ハイパードルフィン 第81潜航). Kaikata Seamount, Izu-Ogasawara (Bonin) Islands area, 530 m depth (Hyper-Dolphin #81).

アナビキノコクラゲ(新称) *Frillagalma vityazi* Daniel, 1966 (Fig. 24.29)

ヒドロ虫綱 Hydrozoa・管クラゲ目 Siphonophora・ヨウラククラゲ科 Agalmatidae

分布：インド洋，北太平洋，大西洋，表層-漸深層。/ 泳鐘部頂端から栄養部下端までの長さ 3-4 cm.

栄養部の縁が，保護葉の突起によって鋸歯状に見えることから識別しやすい。栄養部を伸長させた様子が観察されたことはない。泳鐘部と栄養部の長さはほぼ同じか，若干前者の方が短め。泳囊側面を走る水管は蛇行しない。触手側枝の形態が特徴的で，刺胞叢の先は小型の囊状構造物がふたつ連なった態をなし，末端の囊には1本の指状突起が形成されている (Fig. 24.29.B)。原記載では，個々の泳鐘上を走る隆起線がフリル状を呈するとされ，これが属名の由来である。しかしながら，この記載は誤りであることが明らかにされ (Pugh 1998)，我々の採集標本においてもフリル状ではない。生物発光が認められる。(喜多村・三宅・Lindsay)

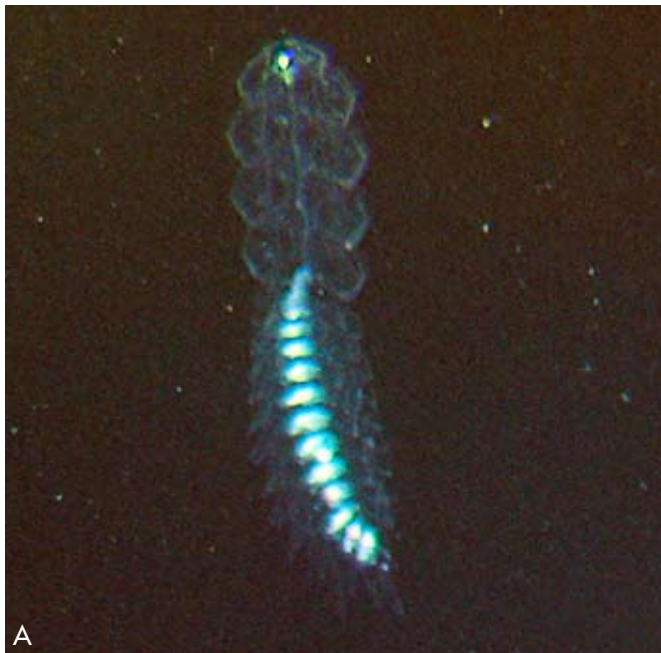


Fig. 24.29. A. 伊豆大島東方沖，深度 597 m (ハイパードルフィン 第 522 潜航)；B. 触手側枝，標本，喜多村 稔。A. East Off Izu Ohshima, 597 m depth (Hyper-Dolphin #522); B. Tentillum, specimen photo by M. Kitamura.

ヤツイトクラゲ(新称) *Lychnagalma utricularia* (Claus, 1879) (Fig. 24.30)

ヒドロ虫綱 Hydrozoa・管クラゲ目 Siphonophora・ヨウラククラゲ科 Agalmatidae

分布：地中海，バハマ近海，相模湾，深度 400-700 m。/ 泳鐘部の長さ 5 cm.

小型で，泳鐘部は両端がやや細く紡錘形に近い。本種は，触手側枝の形態が非常に特徴的。側枝の刺胞叢内に形成される刺胞帯は，複雑にコイルして，被膜に覆われ，先端には大型の終末囊が付属する。終末囊からは付属糸が8本生じている (Fig. 24.30.C)。刺胞叢と終末囊は非常に大型で，潜水調査船からの観察においても1本の触手に連なっている様子が，遠目にもよく目立つ。短時間ながら浮遊姿勢が観察されており，水平方向へ伸ばした幹から触手を水平横方向に張り出す。終末囊は僅かに正の浮力を示すため (Pugh & Harbison 1986)，水平方向へ張り出した触手上に，触手側枝が立ち並んでいるものと考えられる。あまり行動的でなく，遊泳能は低い。(喜多村・三宅・Lindsay)



Fig. 24.30. A, B. 相模湾，深度 436 m (ハイパードルフィン 第 523 潜航)；C. 触手側枝，標本(相模湾)，喜多村 稔。A, B. Sagami Bay, 436 m depth (Hyper-Dolphin #523); C. Tentilla, specimen (Sagami Bay) photo by M. Kitamura.

ヒノオビクラゲ *Marrus orthocanna* (Kramp, 1942) (Fig. 24.31)

ヒドロ虫綱 Hydrozoa・管クラゲ目 Siphonophora・ヨウラククラゲ科 Agalmatidae

分布：大西洋北部，北極海，三陸沖，相模湾，深度 0-2000 m./ 泳鐘部の長さ 6-8 cm.

泳鐘の各種水管，幹，栄養部（保護葉以外）は鮮やかな緋色を呈す。遠目にもよく目立つ気泡体は，やや細長く若干湾曲したバナナ型を呈する。泳鐘部は扁平，各々の泳鐘は上方から見た時 Y 字型を呈し，2 列に並ぶ。泳鐘側面には隆起線を有さない。泳嚢は Y 字に近い T 字型を示し，その側面を走る水管は直進して蛇行しない。栄養部は極めて長く，伸縮自在。触手は無数に存在し，非常に細い。遊泳は強い。色彩には若干の変異があり，原記載および我々の観察個体はあざやかな緋色であるが，北極海産の標本は緋色がかった褐色と報告されている (Andersen 1981)。 (喜多村・三宅・Lindsay)

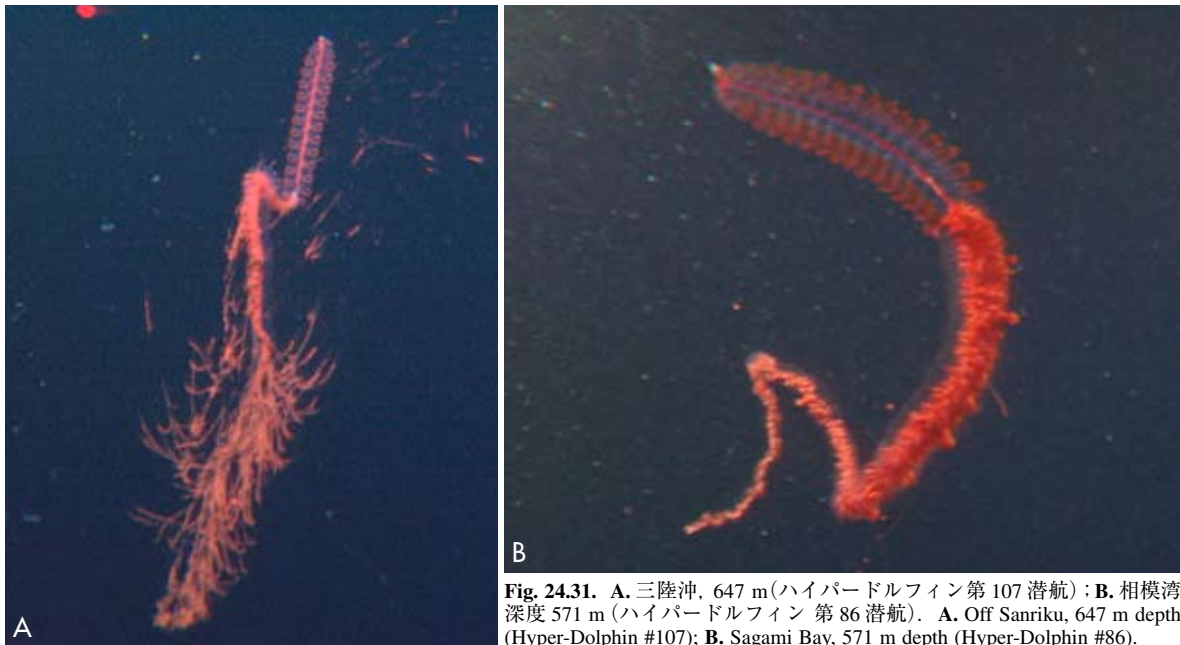


Fig. 24.31. A. 三陸沖，647 m (ハイパードルフィン第 107 潜航)；B. 相模湾，深度 571 m (ハイパードルフィン 第 86 潜航)。A. Off Sanriku, 647 m depth (Hyper-Dolphin #107); B. Sagami Bay, 571 m depth (Hyper-Dolphin #86).

ヒノオビクラゲ属の 1 種 *Marrus* sp. (Fig. 24.32)

ヒドロ虫綱 Hydrozoa・管クラゲ目 Siphonophora・ヨウラククラゲ科 Agalmatidae

分布：房総半島沖，相模湾，深度 270-438 m./ 泳鐘部の長さ約 6-8 cm.

白く目立つ気泡体，長い泳鐘部，および収縮時の栄養部が塊状であることに特徴を持つ (Fig. 24.32.A)。ヒノオビクラゲと異なり，泳鐘や幹などは無色。褐色の栄養体と白色の触手の組み合わせは，前述したケムシクラゲ科の 1 種に似るが，小型の泳鐘を多数持っていること，栄養部を塊状に収縮させることなどから区別できる。泳鐘は，上方から見ると Y 字型で幹との接触面の突起は大型で舌状を呈する (Fig. 24.32.B)。泳嚢両側面の水管が蛇行せず直進することはヒノオビクラゲ属の特徴のひとつ。触手側枝は比較的単純で，刺胞帯がコイルし，その先に終糸を持つ (Fig. 24.32.C)。本種発見時には，既に栄養部は塊状に収縮しており，伸長させた様子は観察されていない。相模湾において過去に撮影されていたクラゲ (Fig. 24.32.D) が同種の栄養部伸長の様子なのかもしれない。 (喜多村・三宅・Lindsay)

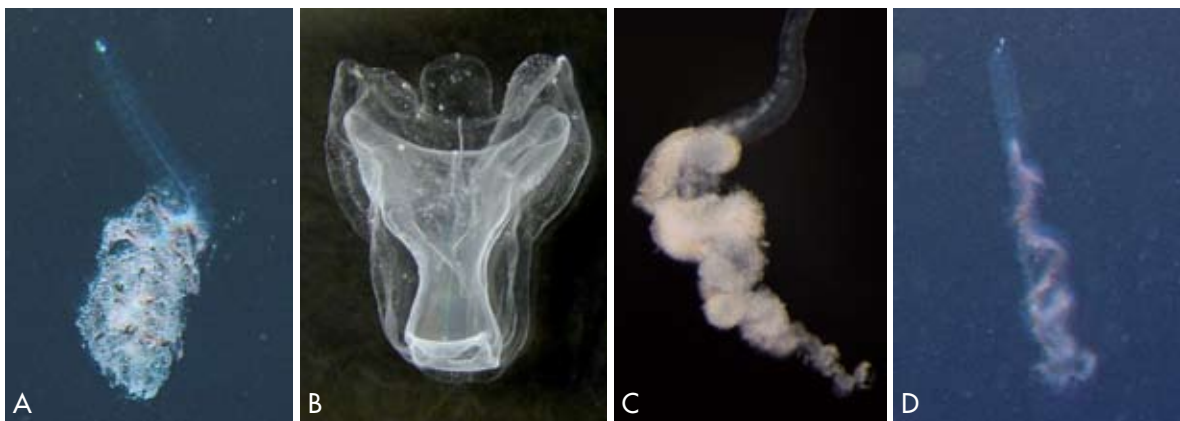
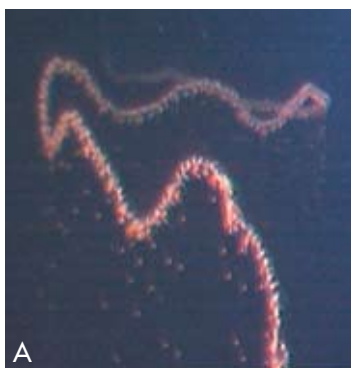


Fig. 24.32. A. 房総半島沖，深度 438 m (ハイパードルフィン 第 521 潜航)；B. 泳鐘，標本，喜多村 稔；C. 触手側枝，標本，喜多村 稔；D. 相模湾，深度 270 m (ハイパードルフィン 第 85 潜航)。A. Off Boso Peninsula, 438 m depth (Hyper-Dolphin #521); B. Nectophore, specimen photo by M. Kitamura; C. Tentillum, specimen photo by M. Kitamura; D. Sagami Bay, 270 m depth (Hyper-Dolphin #85).



オオダイダイクダクラゲ？

?*Halistemma amphytridis* (Lesueur & Petit, 1807)
(Fig. 24.33)

ヒドロ虫綱 Hydrozoa・管クラゲ目 Siphonophora・
ヨウラククラゲ科 Agalmatidae

分布：相模湾，深度 794 m./ 泳鐘部の長さ
80-100 cm.

大型の管クラゲ。伸長時には (Fig.24.33.A)，
全長 8-10 m になると思われる。他種と比べて
頑丈で，潜水調査船と軽く接触したくらいでは
バラバラにならない。泳鐘部は長く棒状で，泳
鐘を 50 個前後有していた。おそらく触手側枝
は楕円体形の刺胞叢と終糸を 1 本のみ持つ。伸
長時には刺胞叢を吊り下げるが，収縮時には栄
養部へ完全に収納される (Fig.24.33.B)。収縮時
の姿はナガヨウラククラゲ *Agalma elegans* に似
るが，触手側枝の形態が異なる。既往の研究に
おいてもオオダイダイクダクラゲは分類学的な
混乱を含んでいる。(喜多村・三宅・Lindsay)

Fig. 24.33. A-D. 相模湾，深度 794 m (ドルフィン-3K 第 327 潜航)。A-D. Sagami Bay, 794 m depth (Dolphin-3K #327).

ヨウラククラゲ科？ の 1 種 - 1 ? Agalmatidae gen. et sp. 1 (Fig. 24.34)

ヒドロ虫綱 Hydrozoa・管クラゲ目 Siphonophora・ヨウラククラゲ科？ Agalmatidae

分布：相模湾，深度 667 m./ 泳鐘部の長さ 3-4 cm.

気泡体は目立たず，潜水調査船からは確認し難い。泳嚢が大型なため，個々の泳鐘は明瞭に視認できる。栄養体はイチジク様の形態をなし，赤色でよく目立つ。一方，栄養体基部より生じていると思われる触手は，極めて細いのか，極度に縮めているのか，映像からは確認できない。透明で栄養体と同程度の大きさの保護葉が多数，幹上に連なっている。撮影された個体はきわめて不活発で，潜水調査船が引き起こす水流の乱れに巻き込まれても，遊泳や栄養部の収縮といった行動を見せなかった。(喜多村・三宅・Lindsay)

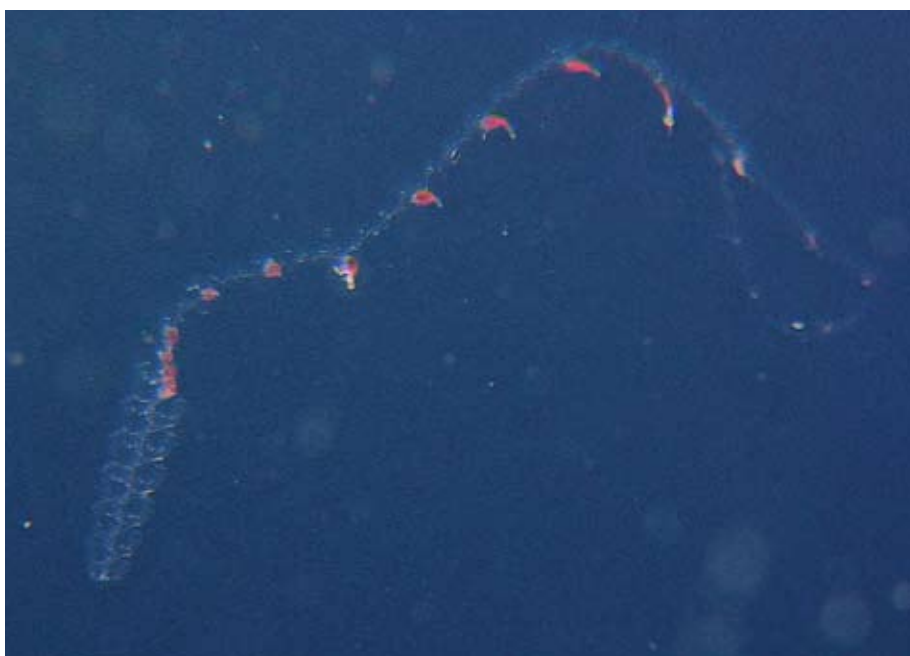


Fig. 24.34. 相模湾，深度 667 m (ハイパードルフィン 第 518 潜航)。Sagami Bay, 667 m depth (Hyper-Dolphin #518).

ヨウラククラゲ科？ の1種-2 ? Agalmatidae gen. et sp. 2 (Fig. 24.35)

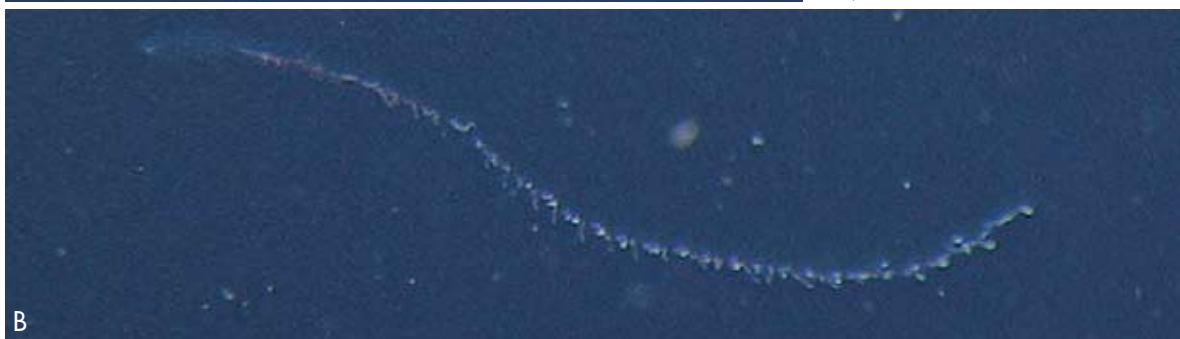
ヒドロ虫綱 Hydrozoa・管クラゲ目 Siphonophora・ヨウラククラゲ科？ ? Agalmatidae

分布：相模湾，深度 670 m./ 泳鐘部の長さ 3-4 cm.

クラゲの体先端部に位置する白色点として，気泡体は比較的良く目立つ．一方，泳鐘の輪郭は不鮮明で，泳鐘表面の隆起線や泳囊内壁の筋肉組織が発達していないものと思われる．泳鐘は2列に並び，計 10 個程度．個々の泳鐘の間隔は密ではないように見える．泳鐘部に比べて栄養部はきわめて長く，伸長した際には前者の 10 倍を軽く超える．栄養体は細い筒状をなして数多く，きわめて薄い赤褐色を帯びるか白色．潜水調査船による攪乱（水流あるいは光）からの逃避は積極的であるが，遊泳能力はきわめて小さい．（喜多村・三宅・Lindsay）



Fig. 24.35. A, B. 相模湾，深度 670 m (ハイパードルフィン 第 518 潜航). A, B. Sagami Bay, 670 m depth (Hyper-Dolphin #518).



ヘビクラゲ *Bargmannia amoena* Pugh, 1999 (Fig. 24.36)

ヒドロ虫綱 Hydrozoa・管クラゲ目 Siphonophora・ヘビクラゲ科 Pyrostephidae

分布：北大西洋，相模湾，深度 400-900 m./ 泳鐘部の長さ 5-10 cm.

サインカーブを描くかのように，蛇行遊泳を行う．気泡体は遠目にも比較的目立ち，泳鐘部は長い．栄養部を構成する個々の器官には大型のものはなく，栄養部は白色の帯の態をなす．現場観察からは確認できない形質として，1) 個々の泳鐘が細長い，2) 幹との接触面に形成される突起 Thrust block が大型の三角形，3) 触手側枝に存在する刺胞叢は直線的あるいはわずかに湾曲してコイルしない，4) 泳囊両側面を走る水管はまっすぐで蛇行しない，といった属としての特徴がある．ヘビクラゲ属は近年，相次いで新種が記載され，現在 4 種を含んでいる (Mapstone 1998, Pugh 1999)．種同定に際してもっとも有用なのは保護葉の形態で，泳鐘を用いての同定は難しいが隆起線の走り方に違いがある．（喜多村・三宅・Lindsay）

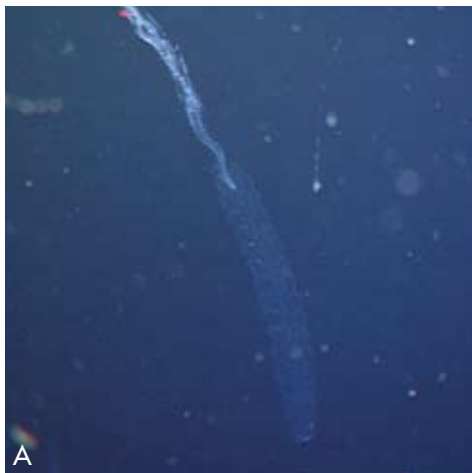


Fig. 24.36. A. 相模湾，深度 407 m (ハイパードルフィン 第 109 潜航)；B. 鴨川沖，深度 461 m (ハイパードルフィン 第 521 潜航). A. Sagami Bay, 407 m depth (Hyper-Dolphin #109); B. Off Kamogawa, 461 m depth (Hyper-Dolphin #521).

ツクシクラゲ属の1種 *Forskalia* sp. (Fig. 24.37)

ヒドロ虫綱 Hydrozoa・管クラゲ目 Siphonophora・ツクシクラゲ科 Forskaliidae

分布：相模湾，三陸沖，中層性。/ 全長 8-10 cm.

泳鐘部は上端付近が細く，泳鐘は中心の幹に多列あるいは螺旋状に配列されている。本属には個々の泳鐘が左右対称形をなさない種が多い。泳囊側面を走る水管は，まっすぐに蛇行しない。栄養部においては，中心の幹は螺旋状に縮められており，まっすぐに伸長させた様子が観察されたことはない。個々の栄養体は，幹より生じる長い柄の先端に形成され特徴的である。葉型，長枕型，膝型といった，形態の異なる複数種の保護葉を有していることが知られている。Pugh (2003) によれば，本属には6種と同定に疑いの残された2種が含まれている。(喜多村・三宅・Lindsay)

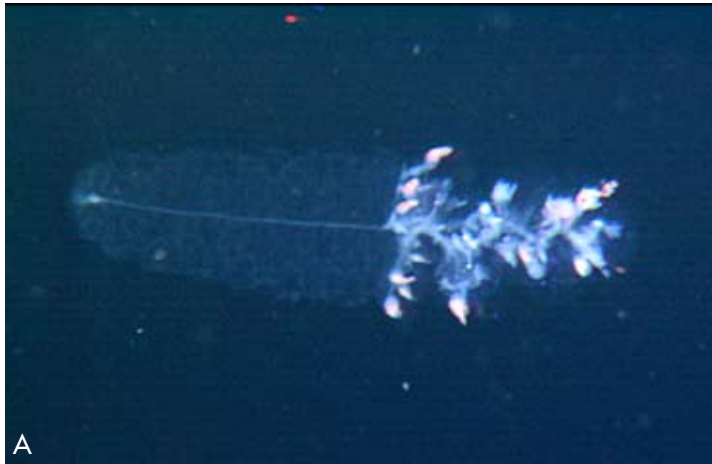


Fig. 24.37. A. 三陸沖，深度 462 m (ハイパードルフィン 第 106 潜航); B. 房総半島沖，深度 504 m (ハイパードルフィン 第 521 潜航). A. Off Sanriku, 462 m depth (Hyper-Dolphin #106); B. Off Boso Peninsula, 504 m depth (Hyper-Dolphin #521).

アワハダクラゲ (新称) *Erenna laciniata* Pugh, 2001 (Fig. 24.38)

ヒドロ虫綱 Hydrozoa・管クラゲ目 Siphonophora・アワハダクラゲ科 (新称) Erennidae

分布：メキシコ湾，バハマ近海，相模湾，深度 690-860 m./ 泳鐘部の長さ約 15 cm まで。

ヨウラククラゲに似て栄養体部は収縮し，長く伸長する様子は観察されていない。泳鐘部は全長の 1/2 よりやや短い。個々の泳鐘は，扁平で Y 字型を呈し，比較的大型 (幅約 3 cm まで) であるが脆弱で壊れやすい。一方，泳囊は T 字型，泳囊表面を走る水管は黒色で角状管 Horn canal を持たない。栄養部の外面は顆粒状の斑点模様が顕著，これは保護葉の下端近くに存在する刺胞を多数含む細胞塊のためであろう。本種は触手側枝の形態が特徴的で，刺胞帯 (Cnidoband, Fig. 24.38.B 褐色部分) 基部より終末突起が生じ，その先端近くには眼点様斑紋を持つ。これら触手側枝を硬直させつつすばやく振動させる様子が観察されており，遊泳するヤムシ類や稚魚を模した擬態ではないかとの報告がある (Pugh 2001)。(喜多村・三宅・Lindsay)



Fig. 24.38. A. 相模湾，深度 691 m (ハイパードルフィン 第 304 潜航); B. 触手側枝，標本(相模湾)，喜多村 稔. A. Sagami Bay, 691 m depth (Hyper-Dolphin #304); B. Tentillum, specimen (Sagami Bay) photo in aquarium by M. Kitamura.

胞泳亜目の1種

Physonectae gen. et sp. (Fig. 24.39)

ヒドロ虫綱 Hydrozoa・管クラゲ目 Siphonophorae

・胞泳亜目 Physonectae

分布：相模湾，伊豆大島東方沖，深度 590-750 m./ 泳鐘部の長さ約 10 cm.

気泡体，泳鐘ともに明瞭に視認できる．泳鐘部は長く短冊状で，先端近くは若干幅が狭まる．栄養部は，伸長時には紐状であるが (Fig. 24.39.A) 収縮時には幹が螺旋状 (Fig. 24.39.B, C) を呈し，この特徴により他種と識別しやすい．触手側枝は緋色で，極度に栄養部を収縮させたときには栄養部全体が緋色に見える．遊泳能力は比較的高く，螺旋状に縮めた栄養部をゆっくり回転させながら，ときには栄養部末端を鞭打つように動かしながら進む．(喜多村・三宅・Lindsay)

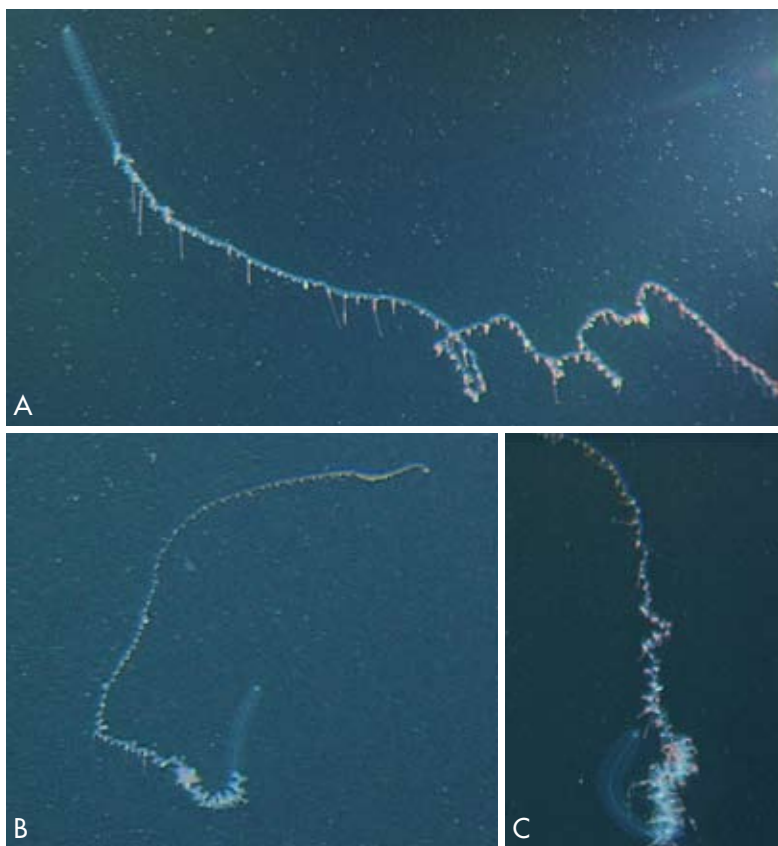
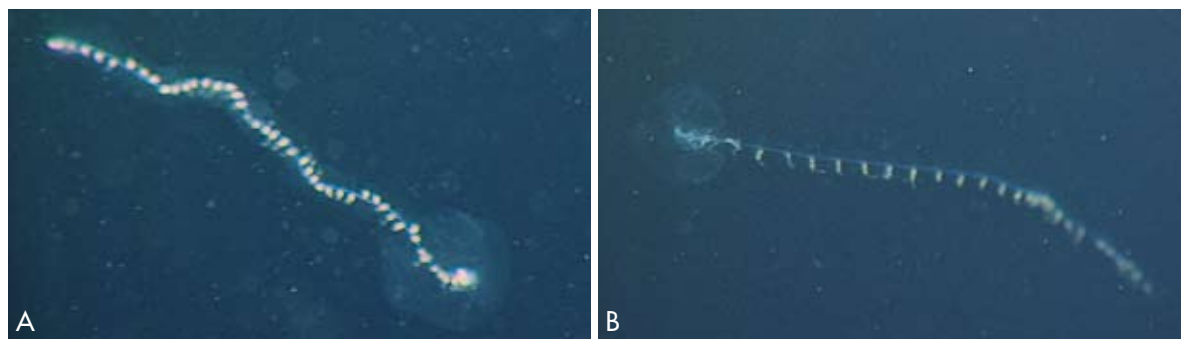


Fig. 24.39. A-C. 相模湾，深度 735 m (ハイパードルフィン 第 523 潜航). A-C, Sagami Bay, 735 m depth (Hyper-Dolphin #523).



アイオイクラゲ科の複数種

Prayidae gen. et spp. (Fig. 24.40)

ヒドロ虫綱 Hydrozoa・管クラゲ目 Siphonophora・アイオイクラゲ科 Prayidae

分布：伊豆大島東方沖から三陸沖，深度 400-850 m./ 泳鐘部の直径 2 cm.

泳鐘部は，半球形の泳鐘が 2 つ合わさってほぼ球形．泳囊が深く見える場合もあるが，実際にはそれほど深くはなく，開口部も大きい．遊泳時，これら 2 つの泳囊は水の吸い込み・吐き出しを交互に行う．一度の水の吐き出しによる前進距離は短く，連続的でせせかした泳ぎで遊泳力は強くない．Fig. 24.40.C, D は同種と思われる．(喜多村・三宅・Lindsay)

Fig. 24.40. A. 伊豆大島東方沖，深度 448 m (ハイパードルフィン 第 522 潜航)；B. 房総半島沖，深度 444 m (ハイパードルフィン 第 521 潜航)；C. 伊豆大島東方沖，深度 844 m (ハイパードルフィン 第 522 潜航)；D. 三陸沖，深度 471 m (ハイパードルフィン 第 103 潜航). A. East of Izu-Oshima Island, 448 m depth (Hyper-Dolphin #522); B. Off Boso Peninsula, 444 m depth (Hyper-Dolphin #521); C. East of Izu-Oshima Island, 844 m depth (Hyper-Dolphin #522); D. Off Sanriku, 471 m depth (Hyper-Dolphin #103).



マツノミクラゲ属の1種 *Vogtia* sp. (Fig. 24.41)

ヒドロ虫綱 Hydrozoa・管クラゲ目 Siphonophora・パテイクラゲ科 Hippopodiidae

分布：相模湾，深度 424 m / 泳鐘部の長さ 3-4 cm.

気泡体を持たず，同型の泳鐘を多数有する仲間，撮影された個体は栄養部が極度に縮んでいるか切れてしまったものと思われる．本属は現在 4 種記載されている．撮影された個体は泳鐘部に複数の突起があるため，個々の泳鐘が円形である *V. glabra* 以外の種類 (*V. pentacantha*, マツノミクラゲ *V. serrata*, *V. spinosa*) であろう．パテイクラゲ科の各種は貝形類を専食することが報告され (Purcell 1981)，大西洋における調査において両者の緯度・深度分布は良く一致する (Pugh 1991)．(喜多村・三宅・Lindsay)

Fig. 24.41. 相模湾，深度 424 m (ハイパードルフィン 第 109 潜航)．Sagami Bay, 424 m depth (Hyper-Dolphin #109).

コフタツクラゲ属(新称)の1種 *Lensia* sp. (Fig. 24.42)

ヒドロ虫綱 Hydrozoa・管クラゲ目 Siphonophora・フタツクラゲ科 Diphyidae

分布：相模湾，深度 352 m / 泳鐘部の長さ 1-2 cm.

前後 2 種類の泳鐘と，前部泳鐘下端より生じる長い栄養部からなる．体囊および栄養部の生じる位置が泳囊下端のレベルであることは，幹室が非常に浅いことを示す．この形質により，本種はコフタツクラゲ属の種と思われる．体囊は棒状で，前部泳鐘の高さの 1/2 よりやや短い．前部泳鐘表面を上下に走る隆起線の数で映像からは確認できないが，7 本であれば *L. multiristata*，5 本であれば *L. conoidea* になる．後者の浮遊姿勢として，「2 つの泳鐘は水平に，そこから栄養部を垂直に垂下する」ことが報告されており (Mills et al. 1996)，Fig. 24.42.A はそれに似る．コフタツクラゲ属は少なくとも 19 種を含む大群であり，他種の浮遊姿勢については知見が乏しい．(喜多村・三宅・Lindsay)



Fig. 24.42. A, B. 相模湾，深度 352 m (ハイパードルフィン 第 240 潜航)．A, B. Sagami Bay, 352 m depth (Hyper-Dolphin #240).



◀ ジュウジタイノウクラゲ *Chuniphyes multidentata* Lens & van Riemsdijk, 1908 (Fig. 24.43)

ヒドロ虫綱 Hydrozoa・管クラゲ目 Siphonophora・フタツタイノウクラゲ科 Clausophyidae

分布：太平洋，大西洋，深度 300-800 m. / 泳鐘部の長さ 4-5 cm.

前後 2 つの泳鐘を有し，前部泳鐘の先端は鋭く尖る．これらは堅くて丈夫．前部泳鐘の体囊上端は泳鐘頂端近くに達し，基部末端のやや上方では左右に大きく膨出するため，全体として十字型を呈する．この形質は潜水調査船からもしっかり確認でき，種同定が容易．幹室は深く，泳囊の高さの 1/2 程度．前部泳鐘表面に走る隆起線は，泳鐘頂端から 4 本生じそれぞれ 2 分岐して計 8 本が泳鐘下端に至る．前部泳鐘の側面下端には一対の大型突起を有する．遊泳力は強い．生物発光あり．(喜多村・三宅・Lindsay)

Fig. 24.43. 相模湾，深度 562 m (ハイパードルフィン 第 14 潜航)．Sagami Bay, 562 m depth (Hyper-Dolphin #14).

フタツタイノウクラゲ属の1種

Clausophyes sp. (Fig. 24.44) ▶

ヒドロ虫綱 Hydrozoa・管クラゲ目 Siphonophora・フタツタイノウクラゲ科 Clausophyidae

分布：遠州灘，深度 899 m./ 泳鐘部の高さ 3-4 cm.

前後2つの泳鐘を有し，前部泳鐘が小型で後部泳鐘が大きい．泳鐘表面は隆起線が走らず丸みをおび，やや側扁する．体囊は前部および後部泳鐘に形成される．泳囊両側面を走る放射水管は，背腹両水管との合流点から発して，複雑に折れ曲がった後に環状管に達する．後部泳鐘の幹室下端には，下方への板状の張り出し Mouth-plate がある．これらの形質により属の同定がなされる．種同定は，前部泳鐘における体囊の膨満位置などが重要となる．フタツタイノウクラゲ属は近年まで分類学的混乱が続いていたが，Pugh (2006) により整理され，現在4種が含まれる．(喜多村・三宅・Lindsay)

Fig. 24.44. 遠州灘，深度 899 m (ハイパードルフィン 第80潜航)．Enshu Nada, 899 m depth (Hyper-Dolphin #80).



ムラサキカムリクラゲ *Atolla wyvillei* Haeckel, 1880 (Fig. 24.45)

鉢虫綱 Scyphozoa・冠クラゲ目 Coronatae・ヒラタカムリクラゲ科 Atollidae

分布：太平洋，大西洋，インド洋，南大洋，深度 500-1500 m./ 傘径 15 cm まで．傘は皿形，肉厚で比較的堅牢．下傘中央から大型の胃が下方に突出し，外傘面から見た胃基部の形は4つ葉型．触手数および平衡器数は同数で交互に位置し約 22 となるが個体差がある．縁弁は表面が平滑で，触手・平衡器数の2倍．傘縁近くに存在する放射隔壁は，環状筋内縁を越えて胃方向へ延びることが本種の特徴．触手のうち1本だけが太くて長く Hypertrophied tentacle とよばれ，これを用いて管クラゲ類を捕らえる様子が相模湾において観察されている (Hunt & Lindsay 1998)．Hypertrophied tentacle は，胃隔壁の放射延長上には位置しないことが他種と異なるとされている．全体的に褐色を呈し胃部において特に濃いが，環状筋は白色．生物発光あり．(喜多村・Lindsay)



Fig. 24.45. A. 伊豆大島東方沖，深度 805 m (ハイパードルフィン 第522潜航)；B. 相模湾，深度 1012 m (ハイパードルフィン 第520潜航)．A. East of Izu-Oshima Island, 805 m depth (Hyper-Dolphin #522); B. Sagami Bay, 1012 m depth (Hyper-Dolphin #520).



A



B

バツカムリクラゲ

Atolla vanhoeffeni Russell, 1957 (Fig. 24.46)

鉢虫綱 Scyphozoa・冠クラゲ目 Coronatae・ヒラタカムリクラゲ科 Atollidae

分布：太平洋，大西洋，深度 500-1000 m./ 傘径 3 cm まで。

ムラサキカムリクラゲに似るが小型。外傘面から見た胃基部の形は十字型。下傘面の胃基部 4 末端近くに 2 個ずつ計 8 個の色素点を有し，これを確認することで潜水調査船からの観察においても比較的容易に種同定が可能である。Hypertrophied tentacle は胃隔壁の放射延長上に位置すると報告されているが，固定標本の観察からはわかり難い。胃，色素点，傘縁は褐色を呈する。生物発光あり。（喜多村）

Fig. 24.46. 相模湾, 深度 711 m (しんかい 2000 第 1139 潜航). A. 水槽内撮影, James C. Hunt; B. 標本 (相模湾), 喜多村 稔. Sagami Bay, 711 m depth (Shinkai 2000 #1139). A. Photo in aquarium by J. C. Hunt; B. Specimen (Sagami Bay) photo by M. Kitamura.

ムツアシカムリクラゲ属の 1 種 *Atorella* sp. (Fig. 24.47)

鉢虫綱 Scyphozoa・冠クラゲ目 Coronatae・ムツアシカムリクラゲ科 (新称) Atorellidae

分布：駿河湾，深度 1038 m./ 傘径 1-2 cm 程度。

傘は半球形に近い。寒天質は傘の上部で厚いものの縁部で薄く，傘腔は浅い。触手は 6 本で先端に肥大部を有する。生殖腺は 8 個でスリムな空豆形をなす。傘は無色透明，口柄は濃い焦げ茶色，生殖腺は薄い茶色，さらに触手先端の肥大部は白色を呈する。駿河湾の深度 1038 m において一度だけ観察された。本種はバハマ諸島近海の深度 500 m 付近から採集・記載された *Atorella octogonos* によく似ている。しかしながら，*A. octogonos* は生殖腺以外が無色であると報告されており，口柄が濃褐色を呈している本種とは異なる。（喜多村・Lindsay）

Fig. 24.47. 駿河湾，深度 1038 m (ハイパードルフィン 第 87 潜航). Suruga Bay, 1038 m depth (Hyper-Dolphin #87)



クロカムリクラゲ *Periphylla periphylla* (Péron & Lesueur, 1809) (Fig. 24.48)

鉢虫綱 Scyphozoa・冠クラゲ目 Coronatae・クロカムリクラゲ科 Periphyllidae

分布：7大洋および地中海に広く分布，700 m 以深，ただし高緯度海域では表層にも分布。/ 傘径 20 cm まで。

傘は円錐形で頂端はわずかに丸みを帯び，外傘に1本の環状溝を有する。寒天質は厚い。下傘面は濃褐色を呈し，生殖腺は白色J字型で4対存在する。傘縁には16枚の縁弁と4個の平衡器がある。この平衡器は間軸に位置する。隣りあう2個の平衡器の間に3本ずつ計12本の触手を有し，これらは太くて堅牢である。遊泳時は，これらの触手を後方に曳きずるのではなく傘頂方向に向ける。本種は，ポリプ世代を持たず卵から直接クラゲに発達する (Jarms et al. 1999)。生物発光が認められる。(喜多村・Lindsay)

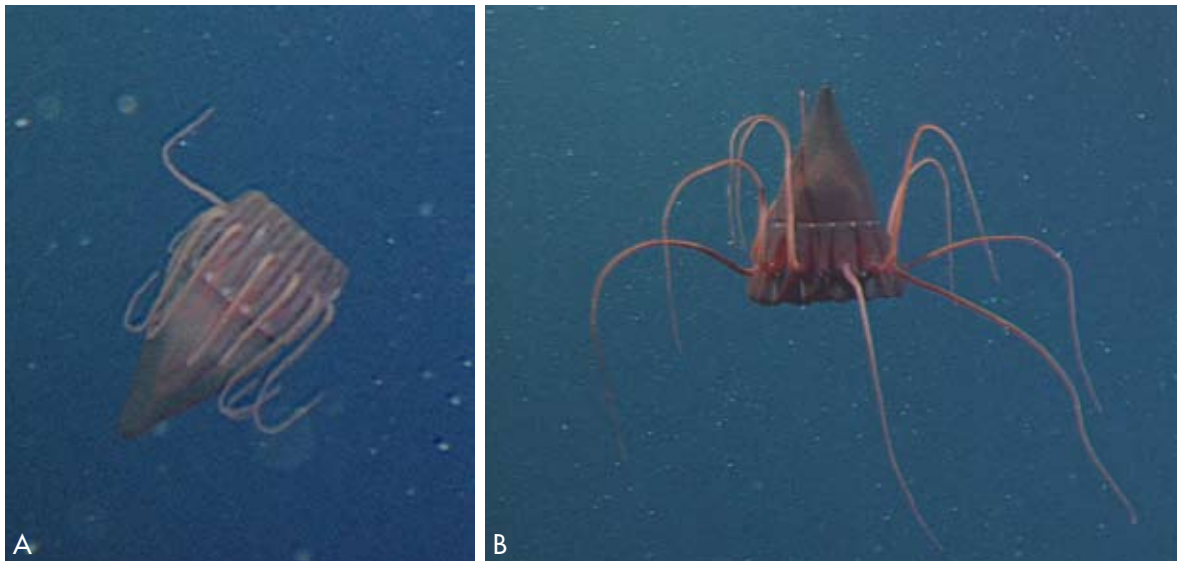


Fig. 24.48. A. 三陸沖，深度 734 m (ハイパードルフィン 第 101 潜航); B. 伊豆大島東方沖，深度 765 m (ハイパードルフィン 第 522 潜航). A. Off Sanriku, 734 m depth (Hyper-Dolphin #101); B. East of Izu-Oshima Island, 765 m depth (Hyper-Dolphin #522).



ベニマンジュウクラゲ

Periphyllopsis braueri Vanhöffen, 1902 (Fig. 24.49)

鉢虫綱 Scyphozoa・冠クラゲ目 Coronatae・クロカムリクラゲ科 Periphyllidae

分布：太平洋，大西洋，インド洋，深度 700–1000 m/ 傘径 15 cm まで。

体型は，縁弁を垂れ下げたときには円筒円錐形，縁弁をたたんだときには円錐形に近いが，傘頂は丸みを帯びる。環状溝は深く，遠目にも目立つ。計 24 枚の縁弁は非常に大きく，この縁弁をカメラの「しほり」のように重ねて傘腔を閉じていることが多い。外傘には，縁弁基部近くから傘頂方向に向かって環状溝手前まで，縦溝が縁弁数と同数走っており非常によく目立つ。触手は丈夫で長さは傘径程度，5 本ずつ 4 群に分かれて計 20 本を有し，先端に向かうにつれ細くなる。傘縁の平衡器数は 4 個で間軸に位置する。外傘，下傘，触手は濃い赤褐色を呈し，体内部の構造を外傘側から透かして見ることはできない。生物発光が認められる。(喜多村・Lindsay)

Fig. 24.49. A, B. 駿河湾，深度 901 m (ハイパードルフィン 第 87 潜航). Suruga Bay, 901 m depth (Hyper-Dolphin #87).



Fig. 24.50. A. 鹿児島湾, 深度 106 m (ハイパードルフィン 第 467 潜航); B. 採集したポリプから遊離・成長し, 稚クラゲになった個体. 標本, 三宅裕志. A. Kagoshima Bay, 106 m depth (Hyper-Dolphin #467); B. A larval medusa cultured from collected polyp, specimen photo by H. Miyake.

アマクサクラゲ

Sanderia malayensis Goette, 1886 (Fig. 24.50)

鉢虫綱 Scyphozoa・旗口クラゲ目 Semaestomeae・オキクラゲ科 Pelagiidae

分布: 天草諸島周辺, 鹿児島湾, 田辺湾, フィリピン, マレー諸島, スエズ運河, 深度 0-110 m./ 傘径 10-15 cm まで.

エフィラ幼生および幼クラゲは橙色を呈するが, 成体はわずかに黄色がかった白色半透明である. 長い 4 本の口腕を持つ. 傘縁から 16 本の長い触手が伸び, 平衡器と触手が交互に配列する. 傘の表面には多数の刺胞塊がみられ, 16 本の放射管は分岐しない. 生殖巣からは花弁状の突出が多数生じ, 傘腔に垂れ下がる. 和名は, 九州の天草地方で多産することによる. 毒性は強く, クラゲ食の傾向がある. 鹿児島湾においては夏期に出現し, 水深 80-130 m にあるサツマハオリムシのコロニーにおいて多数のアマクサクラゲのポリプが見つかった (Miyake et al. 2004a). ストロビラはモノディスク. (三宅・喜多村)

キタミズクラゲ *Aurelia limbata* Brandt, 1835 (Fig. 24.51)

鉢虫綱 Scyphozoa・旗口クラゲ目 Semaestomeae・ミズクラゲ科 Ulmaridae

分布: 北部太平洋, オホーツク海, ベーリング海, 北極海, グリーンランド西方沖, 深度 0-400 m./ 傘径 30 cm まで. ミズクラゲ *Aurelia aurita* によく似るが, 外傘は乳白色で傘縁は褐色に縁取られる. また, 下傘面の水管系は網目状で褐色がかっており, この形質からもミズクラゲと区別できる. これまで浅海のみ出现过と思われていたが, 室蘭, 広尾および釧路沖の水深 200-400 m の海底近くで大量に見つかった (Miyake et al. 2002). 口腕内縁に形成される保育嚢にプラヌラを有した雌個体が多数確認されており, 漸深海帯においてもポリプが付着して繁殖している可能性がある. 北海道沿岸では底曳き網などに大量に入網して漁業被害を与えている. (三宅)



Fig. 24.51. A, B. 釧路南西沖, 深度 200 m (ドルフィン-3K 第 485 潜航). A, B. South-east of Kushiro, 200 m depth (Dolphin-3K #485).

アマガサクラゲ *Parumbrosa polylobata* Kishinouye, 1910 (Fig. 24.52)

鉢虫綱 Scyphozoa・旗口クラゲ目 Semaestomeae・ミズクラゲ科 Ulmaridae

分布：五島列島周辺，富山湾，駿河湾，インドシナ半島沿岸，深度 130-500 m/ 傘径 20 cm まで。

傘は皿状で比較的にもろく，白色半透明．4 本の口腕は傘径とほぼ同長で，各々の内縁は襞状をなし先端は尖る．外傘表面は小さな刺胞瘤が多数存在するため平滑ではない．傘縁には平衡器が 8 つあり，隣り合う 2 つの平衡器の間からは 3 本ずつ計 24 本の触手が生じる．これら触手はきわめて長い．胃腔からは 16 本の放射管が派生するが，このうち平衡器と対応する 8 本は複数回分岐して傘縁付近に三角形の網目構造をつくる．残りの 8 本は分岐せずに傘縁へ向かう．駿河湾妻良沖の水深 270-510 m の海底から 40 m までの近底層に高密度に生息し，サルパや管クラゲなどゼラチン質プランクトンを捕食する様子が観察されている (Fig. 24.52.A) (Miyake et al. 2005)．(三宅・喜多村)

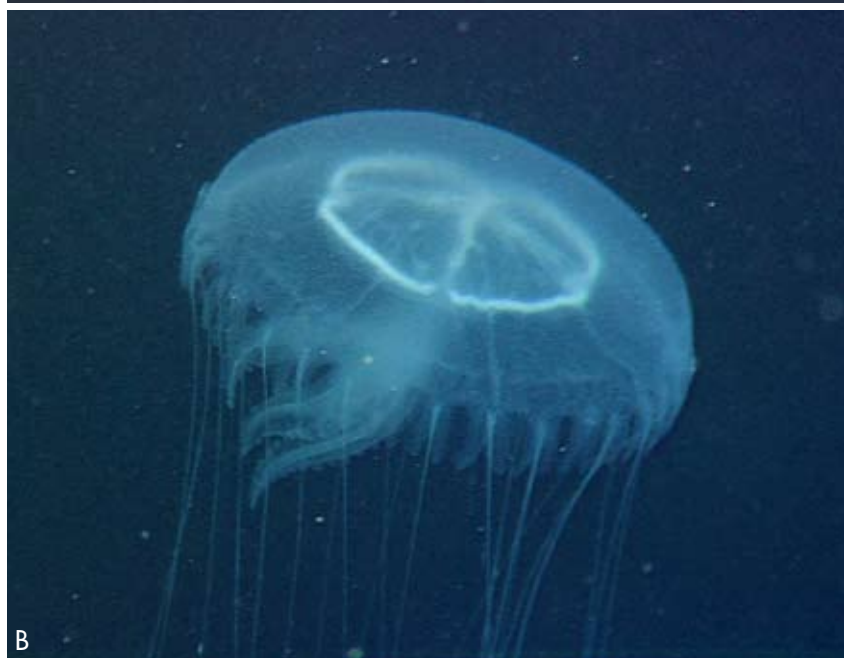
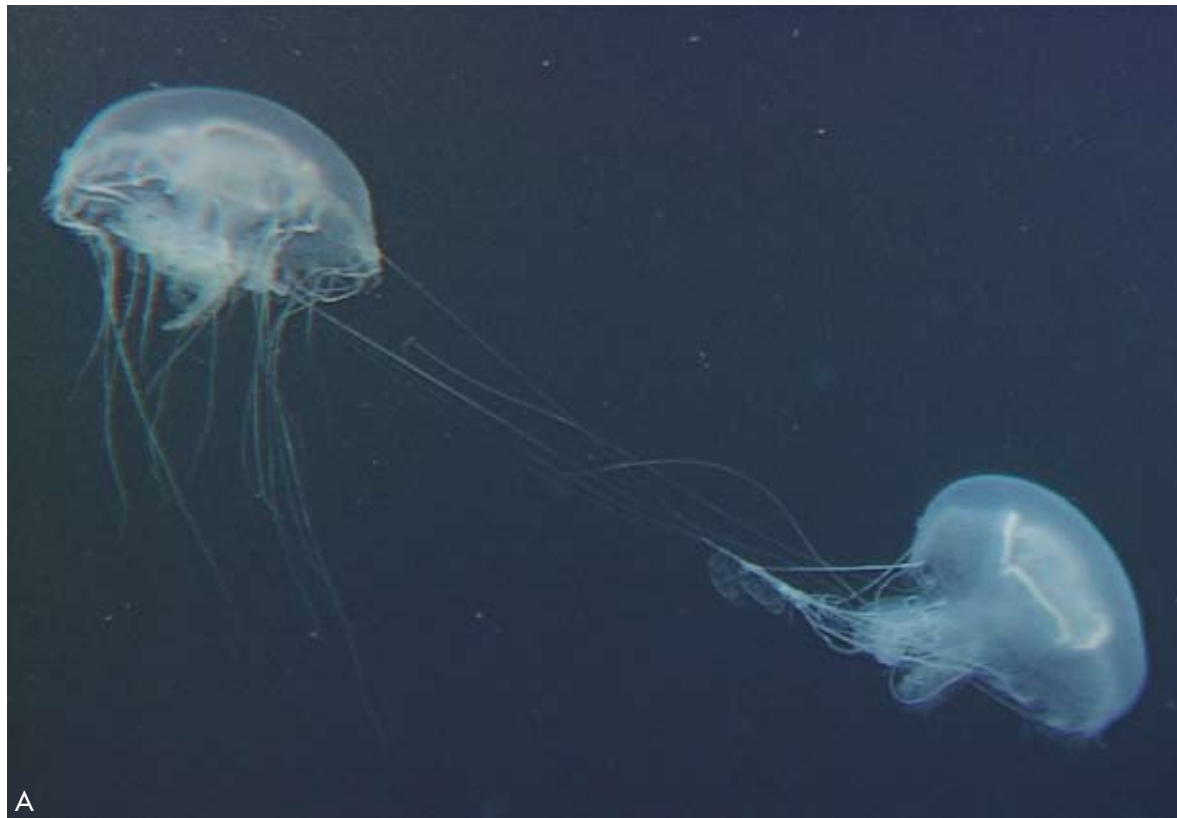


Fig. 24.52. A, B. 駿 河 湾， 深 度 440 m (ハイパー dolphins 第 70 潜航)； **A, B.** Suruga Bay, 440 m depth (Hyper-Dolphin #70).

ディープスタリアクラゲ *Deepstaria enigmatica* Russell, 1967 (Fig. 24.53)

鉢虫綱 Scyphozoa・旗口クラゲ目 Semaestomeae・ミズクラゲ科 Ulmaridae

分布：太平洋，メキシコ湾，南大洋，深度 600-1750 m./ 傘径 60 cm.

傘はきわめて薄く膜状を呈する。放射管は下傘面の全域において複雑な網目構造を形成し、この網目は傘縁近くでより細くなる。傘縁に環状管がある。胃部は短い円筒状。口腕は5本で、各々は薄く幅も狭い。傘縁に触手を有さず、平衡胞は成長とともに数を増し8から20個程度であることが報告されている。傘は無色透明で、水管は白色からやや茶色、胃から口腕にかけては白色を呈する。筋肉帯は発達しておらず、傘の拍動や遊泳のような行動も観察されなかった。Fig. 24.53.A (胃部の右)には寄生性の等脚類が認められる。(Lindsay・喜多村)

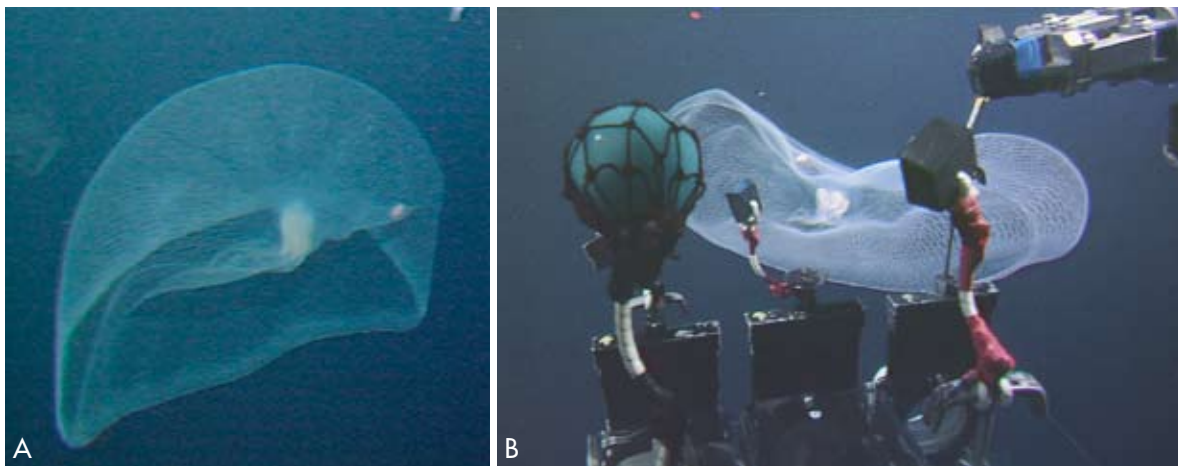


Fig. 24.53. A, B. 三陸沖，深度 662 m (ハイパードルフィン 第 98 潜航). A, B. Off Sanriku, 662 m depth (Hyper-Dolphin #98).



リンゴクラゲ

Poralia rufescens Vanhöffen, 1902

(Fig. 24.54)

鉢虫綱 Scyphozoa・旗口クラゲ

目 Semaestomeae・ミズクラゲ科

Ulmaridae

分布：太平洋，大西洋，インド洋，南大洋，深度 500-1400 m./ 傘径 25 cm まで。

傘は皿型あるいはそれよりやや深く、薄くて非常にもろい。外傘面には刺胞瘤が散在する。放射管は太く胃から環状管まで走っており、しばしば分岐あるいは隣のものとは癒合する。傘径の大きな個体ほど放射管数は増える (Mayer 1910)。触手は非常に細く、長さは傘高程度。口腕は4本以上で、薄く短く、内縁は襞状を呈する。傘および口腕は濃い焦げ茶色を呈する。現在本種のみが記載されているが、他に少なくとも未記載種が2種いると考えられている (Larson et al. 1992)。Fig. 24.54.B は外傘上の刺胞を用いて硬クラゲを捕らえる様子。(喜多村・Lindsay)

Fig. 24.54. A. 三陸沖，深度 1380 m (ハイパードルフィン 第 101 潜航)；B. 相模湾，深度 863 m (ハイパードルフィン 第 518 潜航)。A. Off Sanriku, 1380 m depth (Hyper-Dolphin #101)；B. Sagami Bay, 863 m depth (Hyper-Dolphin #518).



Fig. 24.55. 三陸沖. **A.** 深度 1147 m (ハイパードルフィン 第 101 潜航); **B.** 深度 1041 m (ハイパードルフィン 第 104 潜航). Off Sanriku. **A.** 1147 m depth (Hyper-Dolphin #101); **B.** 1041 m depth (Hyper-Dolphin #104).

ユビアシクラゲ

Tiburonia granrojo Matsumoto, Raskoff & Lindsay, 2003 (Fig. 24.55)

鉢虫綱 Scyphozoa・旗口クラゲ目 Semaestomeae・ミズクラゲ科 Ulmaridae

分布：北太平洋, 深度 650–1500 m/ 傘径 75 cm まで. 傘は球形に近いものの傘腔は浅く, 傘縁触手はない. 口腕は太く 4–7 本で, 傘縁より露出するが傘高よりは長く伸びない. 放射管は均一の太さを保ちつつ複雑に分岐し網目状を呈する. 環状管を有する. 縁弁は上傘面・下傘面ともに刺胞瘤で覆われている. 平衡器数は縁弁数とほぼ同じ. 傘および口腕は赤茶色で, 放射管および環状管は桃色を呈する. 餌生物や捕食者などの知見はない. (Lindsay・喜多村)



? *Stygiomedusa* sp. (Fig. 24.56)

鉢虫綱 Scyphozoa・旗口クラゲ目 Semaestomeae・ミズクラゲ科 Ulmaridae

分布：伊豆・小笠原諸島海域明神海丘, 深度 783 m/ 傘径 30–50 cm.

明神海丘の近底層において撮影された大型種. 口腕の長さ 1–2 m. 傘は円錐形に近いが頂端は丸みを帯びる. 口腕は 4 本, 薄型で非常に長く帯状を呈し, 先端も丸みを帯びる. 観察された個体は口腕の 1 本が途中でちぎれている. 傘縁触手はないと思われる.



傘縁に平衡器と思われる小さな白色点が存在する. 外傘側から放射管が透けて見えるが, それらは直線状で平衡器数の 2 倍と見受けられる. 本種が *Stygiomedusa* 属であるならば, 平衡器に至る放射管は複雑に枝管を派生させて網目状構造を示し, 平衡器間の放射管はその長さの半分まではこの網目に組み込まれない. *Stygiomedusa* 属は *S. gigantea* 1 種のみからなる. (喜多村)

Fig. 24.56. 明神海丘, 深度 783 m (ハイパードルフィン 第 313 潜航). Myojin Seamount, Izu-Ogasawara (Bonin) Islands area, 783 m depth (Hyper-Dolphin #313).

ミズクラゲ科の1種 *Ulmaridae* gen. et sp. (Fig. 24.57)

鉢虫綱 Scyphozoa・旗口クラゲ目 Semaestomeae・ミズクラゲ科 Ulmaridae

分布：伊豆・小笠原諸島海域須美寿島沖，深度 812 m/ 傘径 10 cm.

傘は半球状で透明だが，胃および口腕の内壁のみ濃い赤褐色を呈する．寒天質は非常に厚く，傘腔は円錐型．傘頂側から透かしてみると胃基部は十字型を呈する．放射管は，十字型の胃基部の4末端から3本ずつ，さらに間軸から1本ずつの計16本，すべて直線状．触手は下傘面の傘縁から離れた位置に列をなして並ぶ．これら触手は太くてよく目立つが，その長さは傘高程度と比較的短い．計32個の平衡器は傘縁に位置し，潜水調査船からの観察時には遠目にもよく目立つ．(喜多村)

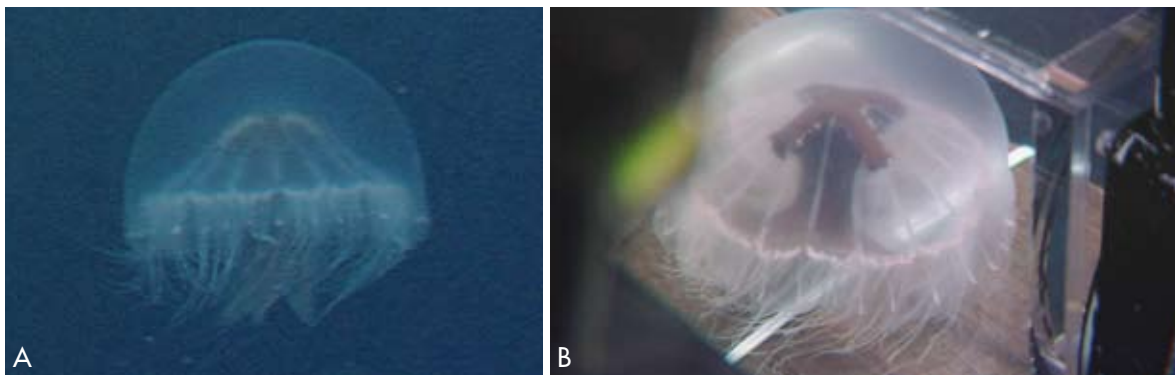


Fig. 24.57. A, B. 伊豆・小笠原諸島海域須美寿島沖，深度 812 m (ハイパードルフィン 第 84 潜航)．**A, B.** Off Sumisu Island, Izu-Ogasawara (Bonin) Islands area, 812 m depth (Hyper-Dolphin #84).